

教師たちの生活と意見

目次

本報告書の要約	2
プロローグ 生徒たちにとっての教師	4
第Ⅰ章 調査方法とサンプル	
1. 調査の方法	9
2. サンプルの概要	10
第Ⅱ章 中学教師の生活	
1. 中学教師の一日	12
2. 部活動の指導	17
・現場からの発言「部活動を通して体験したこと」	21
第Ⅲ章 授業者としての教師	
1. どんな授業を行うか	23
2. 教師としての自信	27
・現場からの発言「教師にとって年齢を重ねるとは」	34
・現場からの発言「教師としての自信」	35
第Ⅳ章 理想的な教師とは	
1. 教師として力を入れたいこと	37
2. 教師はどうあるべきか	43
・現場からの発言「中学教師として必要なこと」	48
第Ⅴ章 教師たちの心のうち	
1. 教師としての気持ち	51
2. 教師の悩み	53
3. 教師をやめたいと思ったとき	57
・現場からの発言「『教師の悩み』について」	62
・現場からの発言「終業式」	63
・現場からの発言「初めての担任で悩んだこと」	64
・現場からの発言「生徒からどんな教師だと思われるか」	66
増えるか教師のバーンアウト	67
資料1 調査票見本	70
資料2 基礎集計表	82

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

本報告書の要約

静岡大学教授
深谷昌志



① 退勤時刻

7時すぎまで学校に残っている教師は40.8%と4割を超える（P.14・図5）。

② 部活動の担当

77.9%の教師が部活動を担当しており（P.17・表4）、休みの日も出勤している者が多い（P.19・表6）。

③ 夏休みに家にいられる日数

9日以内が44.0%で、半数に近い（P.20・図10）。中でも運動部の指導をしていると、ほとんど休みをとれない（P.20・表7）。

④ 授業のスタイル

全体として、教科書にそって指導する教師が多いが（P.24・図11）、具体的な進め方は教科によって異なる（P.25・表8）。

⑤ 授業のわかりやすさ

多くの教師は、7割くらいの生徒が授業を理解していると答えている（P.27・図12）。そして、ベテランの教師になるほど、授業に自信があるという（P.27・図13）。

⑥ 教師としての自信

4～5年たつと、教師として自信を持てるようになる（P.29・表11）。なお教科別では、自信を持ちやすいのが社会や保健体育、持ちにくいのが国語や英語である（P.30・表12）。

⑦ 教師として力を入れたいこと

若い教師は授業をわかりやすく、ベテラン教師は生徒と接する時間を増やしたいという（P. 39・表15）。また教科によって、力を入れたい内容が異なる（P. 40・表16）。

⑧ 教師としての不満

子どものしつけは家庭できちんとやってほしいと思っている教師が9割に達する（P. 52・図21）。

⑨ 教師としての悩み

忘れ物をする生徒が多い（66.0%）、授業時数が足りない（51.7%）、校務分掌の仕事が多い（51.7%）などが主な悩みとなる（P. 54・図22）。

⑩ 教師の体調

「疲れやすい」と感じている教師は「わりと」の28.8%に「とても」の33.5%を加えて、62.3%に達する（P. 57・図23）。

⑪ 教師をやめたいと思ったとき

2～3回以上「教師をやめたいと思った」教師は、50.2%と過半数を超える（P. 59・図25）。

〔全体として〕

朝早くから夜まで、学校の中で生徒の指導にあたっている。そして、夏休みも部活動の指導が入り、思うように休めない。また、授業に追われる一方、生徒指導のむずかしさを味わっている。そのため、中学教師のかなりの者が疲れを訴えている。

〔調査概要〕

対象／東京・岡山の公立中学校の教師の中から無作為に抽出した3,500名に調査票を直接郵送。有効サンプル853名。回収率24.4%。

時期／1991年7月

サンプル数／

男性552名、女性301名、計853名

プロローグ

生徒たちにとっての 教師



授業を大事にする伝統

3年ほど前、信濃毎日新聞から先生についての調査を企画しているので協力して頂けないかとの依頼を受けた。

あらためて触れるまでもなく、長野県は信濃教育の名前が残っている通り、現在でも、優れた実績を展開している地域として知られる。筆者も、これまでに県下の学校を10校以上訪ね、研究者の目を通して、信濃教育を考察してきた。

そして、実績校として名前の通った学校はむろんのことだが、無名の学校を訪ねても、地道な教育への取り組みがなされているのを知った。特に、授業を大事にする姿勢が胸を打った。

「ちょうちん学校」とは、授業の打ち合わせで遅くなった先生たちが、ちょうちんの明かりで下校したことから生じたという。そして、長野では、今でもちょうちん学校が少ない。

正直にいうと、先生たちのそうした姿勢に敬服する反面、それでは私生活が犠牲になる

だけでなく、人間としての幅を広げたり、考え方を深める時間をとれなくなるのではないか、と思う面もあった。したがって、勤務時間の長さは決してほめられる伝統ではないと思った。

それはともかく、研究者の目からすると、信州の教師は意欲的で申し分がないのだが、生徒は教師をどうみているのか、子どものサイドから信濃教育をみつめ直す機会と思い、新聞社の誘いにのることにした。

そこまではよかったのだが、調査を始めようとする、予想外の抵抗に出会った。プリテストに「あなたは担任の先生を好きですか」と尋ねた項目を入れたところ、この項目を削除してほしいという教師が少なくなかった。

教師と子どもとの心の通っている場に分析などというメスを持ち込んでほしくないのだろうか。

先生は熱心に授業をしている

いずれにせよ、調査は開始され、データの回収が終わった。そうした調査データの中で

見る限り、気づいた2、3の結果を紹介しておこう。(対象は県内の中学2年生約1,000人)

まず、図1に目を通してほしい。これは、担任がどんなタイプなのかを尋ねた結果だが、プロフィールの示す通りに、子どもたちは先生が「熱心に授業をしている」「教科の知識もしっかりしている」と評価している。それに、「教育に信念を持っている」ともいう。

そして、先生が熱心に授業をしているという評価は担任についてだけでなく、学校の先生全体にもあてはまる。

授業に熱心な先生は、

①全部がそう	16.8%	} 60.1%
②ほとんど	43.3%	
③半分くらいがそう	28.5%	} 11.4%
④少ししか	10.6%	
⑤1人もいない	0.8%	

と、子どもたちは答えている。

子どもを教育するのが教師の仕事であろう。そして、子どもたちは先生が熱心に授業をしていると評価しているのであるから、全く問題がないように思える。

しかし、そうした結論を出す前に、図2に注目したい。この図は、担任に対する満足感と学校の楽しさとの関係を示している。

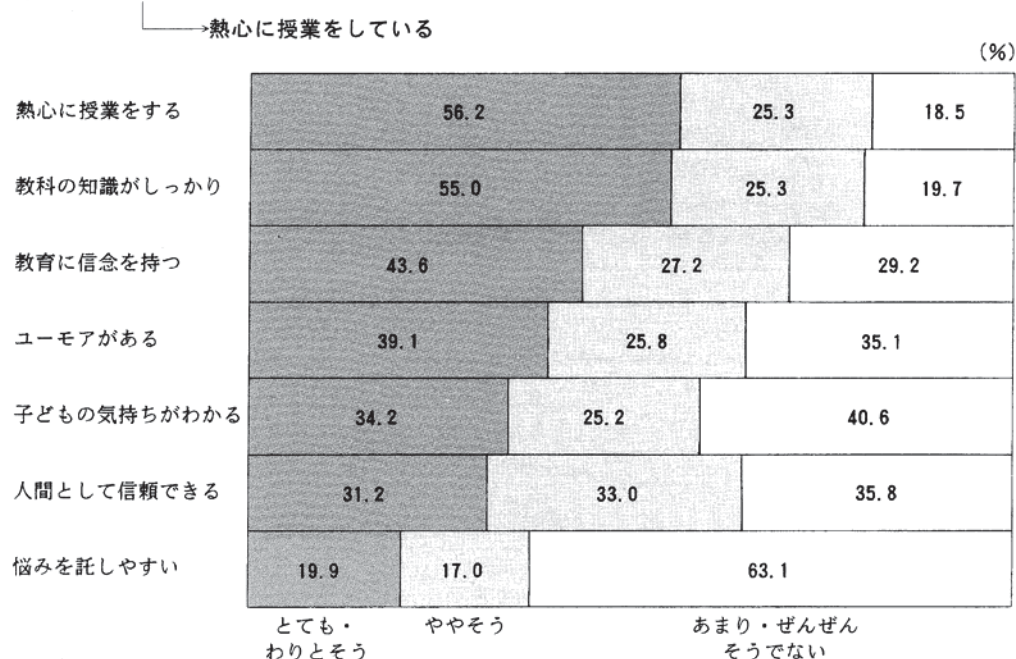
そして、この図から2つの傾向を読みとることができよう。まず、先生との関係がうまくいっていると学校が楽しいと思える点で、中でも、「担任にとっても満足」している子の76.7%は、学校は楽しいと答えている。

子どもたちは、友だちがいるから学校が楽しいという。確かに、友だちの存在は大きいように思うが、図2によれば、教師も学校の楽しさに関係している。少なくとも教師との関係が悪化している子が学校を楽しいと思える割合は2～3割にとどまっている。

それだけに、教師に満足できるかどうかが重要になるが、図の左側に付したように、担任に満足している子は、「とても」の8.5%に、「かなり」の15.7%を含めて、24.2%。これに、「やや」の30.3%を合計しても54.5%にすぎない。

したがって、担任に不満を抱いている子が少なくないように思える。

(図1) 担任への評価



子どもたちが教師に求めるものは

教師の授業に満足している子どもたちが、
どうして、教師に満足していないのか。

そうした問題を解く鍵を図3にまとめてみた。

くわしい数値は省略したいが、これは、すでに触れた「学校の先生にどういうタイプが多いか」をX軸に、そして、「どういう先生を望みたいか」をY軸に取って、クロスさせた図である。

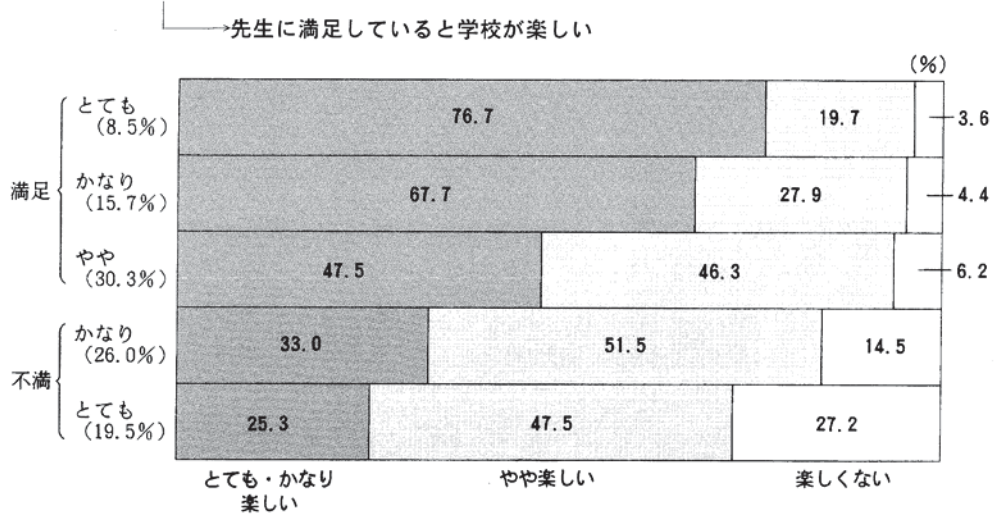
したがって、第1象限は、「そうした先生が多いし、そうした先生を望んでいる」場合、そして、第2象限は、「そうした先生は少ないが、子どもたちから望まれている」教師像、さらに、「それほど望んではないが、そう

したタイプが多い」教師像が第4象限に位置する。

こうした記述をすると、なにやら難しそうだが、この図の意味するところは自ずと明らかであろう。つまり、授業を熱心にする教師は多いが、子どもたちはそうした教師をそれほど望んでいない。そして、子どもたちは、自分たちの気持ちをわかってくれる人間として信頼できる教師を望んでいるが、残念ながら、人間的な魅力を持つ教師は少ないという。

もちろん、この結果には若干の補足が必要であろう。子どもたちは熱心に授業をしている教師に慣れているから、これ以上の熱心さを求めないのであって、この図から、子どもたちは授業に熱心な教師を望んでいないと結論づけるのは妥当でない。

(図2) 先生への満足×学校の楽しさ



さらに、自分たちの気持ちをわかってくれる教師を望んでいるあたりにも、子どもたちの甘えを感じられなくもない。

現代の子どもたちは、いつも誰かが自分のためにしてくれるのがあたり前の状況の中で育ってきた。そのため、してくれることを当然のように求める態度が育ちがちになる。教師との関係についても、自分から働きかけようとせず、何もしてくれないし、わかってもらえないと、教師に不満を抱いている感じがする。

したがって、子どもの言い分を100%信じるつもりはない。それにしても、自分たちの気持ちをわかってもらえないと思っている子が多いのが意外であり、気がかりである。

そこで、教師が自分のことを、「とても」あるいは「だいたい」知っていると思える割

合を示すと、以下の通りとなる。

とても+だいたい=小計

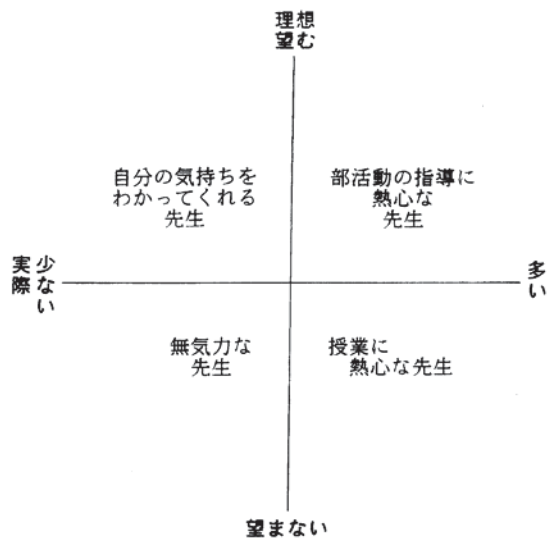
①勉強の成績	51.5+40.7=92.2%
②仲よしの友	20.9+49.2=70.1%
③家庭学習の長さ	7.1+20.2=27.3%
④つきたい仕事	7.9+12.6=20.5%
⑤自分の悩み	3.4+ 7.4=10.8%
⑥好きな歌手	2.6+ 3.1= 5.7%
⑦好きなテレビ	1.5+ 3.7= 5.2%

子どもたちは、先生は自分の成績に関心を持っているが、それ以外のことはわかっていないと思っている。

教師たちは、子どもが思っている以上に、子どもの心のうちを理解しているだろう。

しかし、そうしたおとなの立場から離れて、子どもたちが、担任に自分をわかってもらえないと感じている事実を直視したい。

(図3) 教師の現状と理想



心の絆作りを

子どもたちからすると、「私の（あるいはボクの）先生」であっても、教師は40人の子とつき合わねばならない。中には、なにかと問題をかかえる子どもも少なくなく、その子との対応に追われているうち、その他の子たちへの関心が薄れがちになる。

やむをえない気がしないでもないが、そうしたところから、子どもたちの間に担任は自分のことをわかってくれないという気持ちが生じるのである。

もう少し、具体的な数値をあげておこう。

- | | |
|-------------------|-------|
| ①朝会ったとき、声をかけてくれた | 34.9% |
| ②「がんばれよ」と励ましてくれた | 23.8% |
| ③勉強のわからない所を教えてくれた | 12.4% |
| ④困ったときの相談にのってくれた | 8.6% |
| ⑤みんなの前で自分をほめてくれた | 6.8% |
| ⑥放課後、遊んでくれた | 5.2% |

（「何回もある」と答えた割合）

朝、先生から声をかけてもらった思い出を持つ子は3分の1にとどまっているが、その他の項目になると、その割合はさらに減少している。

こうした数値で見ると限りでは、教師と子どもとの関係が「教える－教わる」に集約され、人間的な触れ合いに乏しい印象を受ける。

数年前、校内暴力と非行で、学校内が荒廃しきった学校を立て直したある中学校長の苦心談を聞く機会があった。さだめし、いろいろな手段を講じたのだろうと思ったのだが、

実際には、生徒の名前を覚え、声をかけることが唯一の対策だったという。

教師全員が生徒の顔写真を持ち、名前と顔を一致させる努力を重ね、クラスの子は毎日20人、クラス外の子30人、計50人に声をかけるのを日課とした。

しかし、実際にやってみると、30人が限度で、結局、朝の登校時、あるいは、昼休みに意識的に声をかけないと、50人のノルマを達成できなかった。そのため、昼休みに職員室にいる先生が減ったとか。そして、3か月後、校内は、いつの間にか落ち着きを取り戻したという。

子どもとの間に人間としての気持ちの通い合いを求める。そうした絆の上に、教育という営みが成立するのであろう。

全国的に、教師たちの研修を見ていると、授業案の検討に多くの時間がさかれている。

しかし、そうした授業を支える前提作り、つまり、人間としての絆をどう作るかについての論議がかわされることが少ない。

ともあれ、教師のほうから声をかけ、そして、励まし、時には、支える。このようなカウンセラータイプの役割が教師に求められているのだが、そうした観点から自己開発が遅れているように思われてならない。ここまで触れてきたのは、生徒たちから見た教師像だが、教師たちはどう考えているのだろうか。

以下、教師を対象とした調査の結果を紹介したい。

第 I 章 調査方法とサンプル



1. 調査の方法

教師調査を行うときのむずかしさのひとつにサンプルの集め方がある。学校経由にすると偏りが生じがちだし、直接郵送するとしても、郵送料がかかる上に、回収率が必ずしも高くない。

今回の調査は、東京・岡山の公立中学校の

教師の中から、無作為に3,500名を抽出し、質問用紙を直接郵送した。返送してくださったのは853名。回収率は24.4%と高く、今回のテーマに対する、先生方の関心の高さがうかがわれる。

2. サンプルの概要

サンプルの年齢は、図1の通りで、30代の教師が多く、図2のように、既婚率は77.9%と、ほぼ8割に達する。

そして、担当教科は、ほぼ以下ようになる。

	全体	男性	女性
社会	16.3%	22.1%	5.6%
国語	15.2	9.4	25.9
数学	15.0	19.6	6.6
理科	13.6	15.0	11.0
保健体育	13.2	14.9	10.3
技術・家庭科	10.8	8.7	14.6
英語	9.4	7.1	13.6
音楽	5.6	3.4	9.6
美術	4.9	3.8	7.0
その他	0.9	0.5	1.7

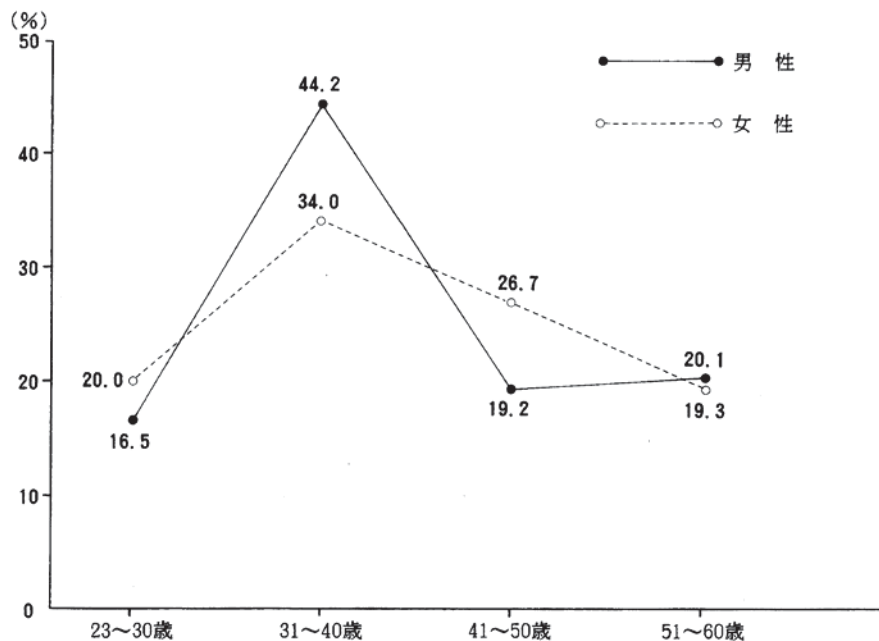
また、本サンプルの学歴は以下のように、4年制大学卒が91.0%で、教育学部以外の出身者が心持ち多い。

短大	5.2%
4年制大学教育学部	41.9
4年制大学教育学部以外	49.1
大学院	3.3
その他	0.5

なお、教師になろうと考えたのはいつ頃かについて、半数近くの者が大学へ入って以降と答えており、これに高校3年の頃を加えると65.9%と、ほぼ3分の2に達する。

小学校の頃	10.0%	
中学校の頃	19.9	
高校1年の頃	4.2	
高校3年の頃	20.1	
大学に入学してから	17.1	} 45.8%
大学4年の就職のとき	20.3	
大学を卒業してから	8.4	

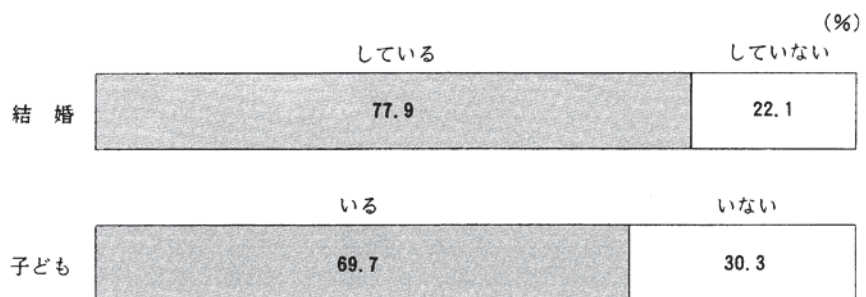
(図1) 年齢



教師を志す年齢が思っているより遅い印象を受けるが、これは小学校教師との対比の問

題で、中学教師の場合、これくらいの時期に志すのかもしれない。

(図2) 結婚・子ども



第Ⅱ章 中学教師の生活



1. 中学教師の一日

それでは、まず中学教師の生活を追ってみよう。中学教師たちは、授業の始まるほぼ30分前に学校に出勤してくる。(図3)。

これを属性別にみると、表1が示すように、女性教師のうち、37.1%はかなり直前になって出勤してくる。家庭をかかえているので、朝のうちはなにかと時間をとられる。そして、息せき切って学校へ出勤してくる教師たちの姿がうかんでくるような数値である。

なお図4によれば、教師たちの通勤時間は、30分くらいがほぼ4割を占める。東京などの大都市では、1時間通勤はざらで、1時間半でも珍しくないといわれるが、教師の場合、学校が都心部でなく、それぞれの地域に点在

しているせいか、通勤時間は思っているより短い。

図5に退勤時刻を示した。朝早く学校へ行っているだけでなく、休み時間もなしに、生徒の面倒を見ているのであるから、4時前に下校しても、十分に勤務をした計算になる。しかし図が示すように、教師たちのうち、6時半が21.3%、7時頃が25.6%で、両者を合わせると46.9%と、ほぼ半数が6時半から7時にかけて退勤している。その他に15.2%が8時以降に下校しているから、ほぼ6割の教師が6時半すぎまで学校に残っているわけで、これでは、多くの教師が過労になるのではと懸念される。なにしろ、10時間以上、学校に

いる教師が少ないのである。もっとも、表2によれば、さすがに7時すぎまで学校にいるのは若い教師のほうが多いような傾向が得られている。

そして帰宅後、図6のような生活をしているという。この中で、どれくらい家事をすることが気にかかるが、図7の通り、女性教師の54.3%と半数以上が家事に時間を費やしている。それに対し、男性教師で長時間、家事をしている人は4.7%にすぎない。

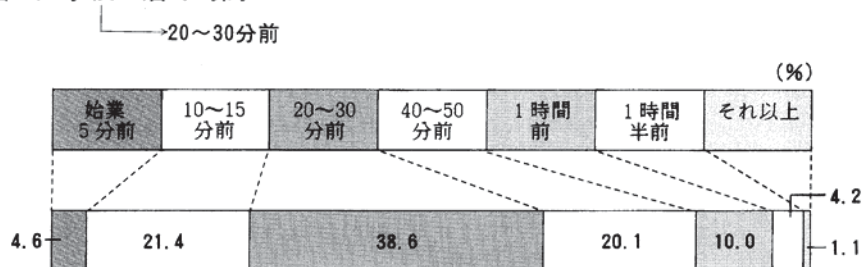
そうすると、女性教師は教材の手ぬきをし

そうだが、図7の下段のように、女性教師たちは、教材の下調べにも精を出している。

家事をしながら、教材の下準備もする。そうなれば、女性教師の帰宅後は多忙をきわめよう。実際にも、表3から明らかなように、女性教師はテレビを見たり、趣味をする時間が少ない。私生活が犠牲にならざるをえないのであろう。

そして図8のように、多くの教師は11時半すぎに就寝している。

(図3) 学校へ着く時間

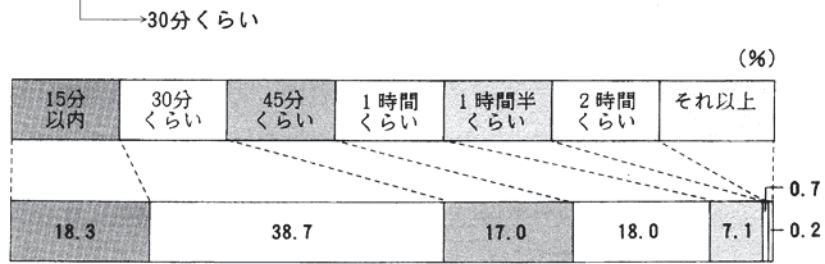


(表1) 学校へ着く時間×属性

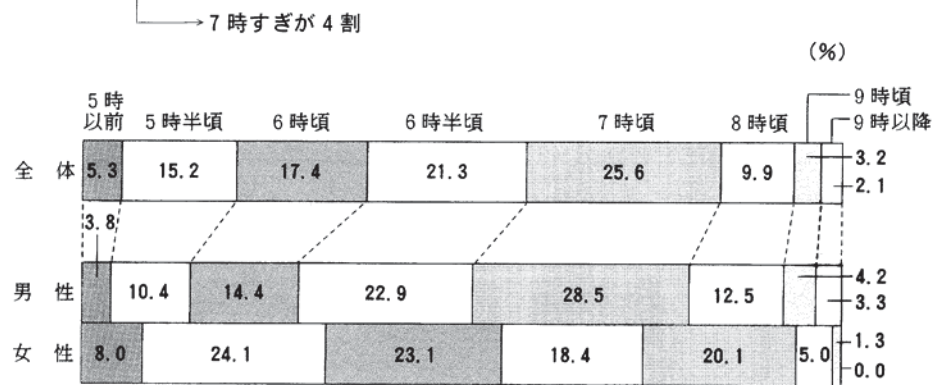
→ 女性教師は直前に

		(%)						
		始業5分前	10~15分前	20~30分前	40~50分前	1時間前	1時間半前	それ以上
性	男性	2.7	17.2	38.0	22.5	12.5	5.6	1.5
	女性	8.0	29.1	39.8	15.7	5.4	1.7	0.3
年代	~29歳	4.0	20.7	34.6	20.0	12.7	6.7	1.3
	30~39歳	5.8	24.9	37.1	15.1	11.6	4.3	1.2
	40~49歳	5.4	20.5	35.1	27.6	8.1	2.2	1.1
	50歳~	1.2	16.1	49.4	22.6	6.5	4.2	0.0
全体		4.6	21.4	38.6	20.1	10.0	4.2	1.1

(図4) 通勤時間



(図5) 退勤時刻



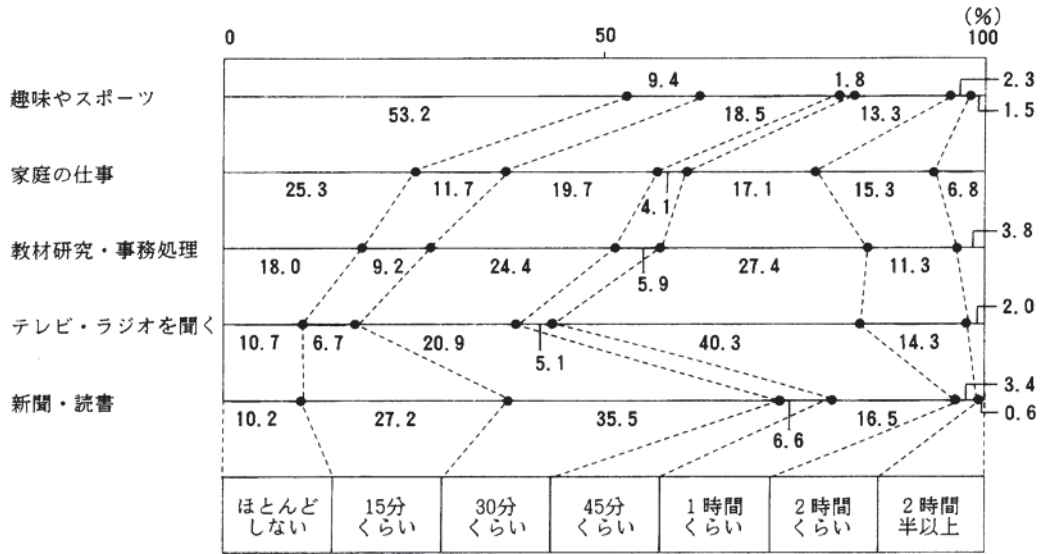
(表2) 退勤時刻×年代

→若い人ほど遅くまで

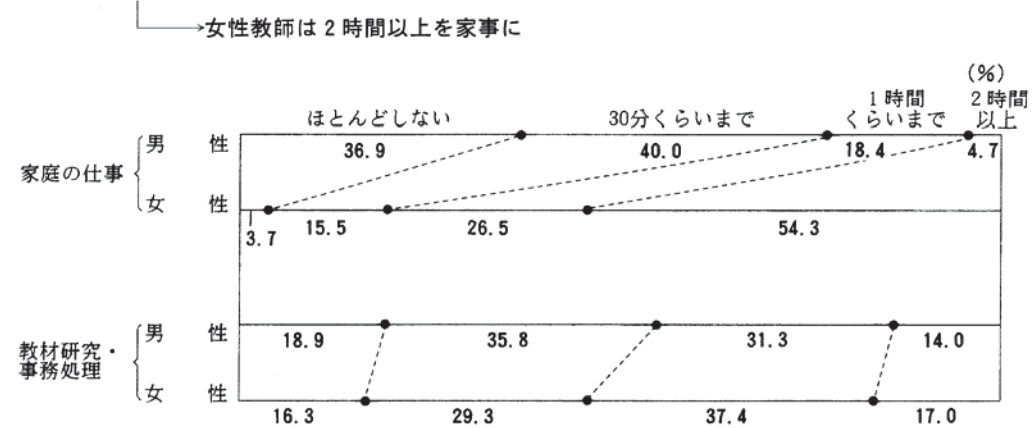
(%)

	6時まで	6時台	7時台	8時台	9時以降
～29歳	7.3	33.4	28.0	20.0	11.3
30～39歳	14.8	39.0	29.1	11.0	6.1
40～49歳	21.7	44.3	24.9	5.9	3.2
50歳～	42.4	37.3	16.7	3.0	0.6

(図6) 帰宅後すること



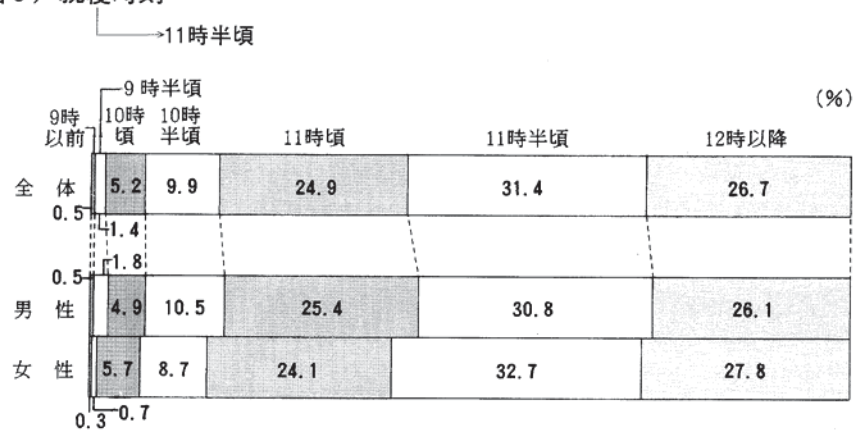
(図7) 帰宅後すること



(表3) 帰宅後すること×性

		(%)						
		ほとんど しない	15分 くらい	30分 くらい	45分 くらい	1時間 くらい	2時間 くらい	2時間 半以上
趣味やスポーツ	男性	48.6	9.9	18.6	2.0	16.1	2.6	2.2
	女性	61.9	8.4	18.2	1.4	8.1	1.7	0.3
家庭の仕事	男性	36.9	14.5	25.5	4.0	14.4	4.0	0.7
	女性	3.7	6.4	9.1	4.4	22.1	36.2	18.1
教材研究・ 事務処理	男性	18.9	9.1	26.7	4.2	27.1	10.4	3.6
	女性	16.3	9.3	20.0	9.0	28.4	13.0	4.0
テレビ・ラジ オを聞く	男性	6.9	5.3	19.8	4.7	41.7	18.7	2.9
	女性	17.7	9.3	23.0	5.7	37.7	6.3	0.3
新聞・読書	男性	9.7	26.3	34.5	6.6	18.2	3.8	0.9
	女性	11.0	28.8	37.4	6.7	13.4	2.7	0.0

(図8) 就寝時刻



2. 部活動の指導

これまで、中学教師たちの毎日の生活を紹介してきた。それでは、学校でのふだんの生活はどうか。

中学教師というと部活動を指導しているイメージがうかんでくる。そして、本サンプルの教師たちも、部活動の指導をしていない者は22.1%で、61.9%は運動部を担当していた(表4)。

そして、部活動の担当を教科別に調べてみると、表5から明らかのように、保健体育の教師はむろんのこと、社会や数学の教師も部活動の指導を担当している。しかし、音楽や美術の教師はあまり部活動の指導にタッチしていない。

それでは、部活動の指導を担当するのに、どれくらい時間をさいているのであろうか。

	全体	男性	女性
1日	6.3%	2.9%	14.0%
2日	5.9	5.2	7.5
3日	12.2	11.8	13.1
4日	13.6	14.2	12.1
5日	21.6	21.4	22.0
6日	28.5	30.3	24.8
7日	11.9	14.2	6.5

(表4) 担当部活動

→ 運動部が6割

	全 体	男 性	女 性
運動部	61.9	75.9	36.5
文化部	16.0	10.4	26.0
担当していない	22.1	13.7	37.5

(%)

そして、表6によれば、休日についても月に2日以上、部活動指導をしている教師は45.8%と、半数に迫っている。平日でも夜遅くまで学校にいるのに、休日も学校へ来て、部活動の指導をする。これでは、教師はいつ休息をとるのかという気持ちになる。

それでも、教師には夏休みや冬休みがあるではないか。しかし図9が示すように、部活動に2週間以上時間をとられる教師は50.6%と半数を超える。その他に、研修やプール指導、補習などに参加せざるをえない。

したがって、夏休みに家にいられる日数について、9日以内が44.0%と、ほぼ半数に達している(図10)。しかも、運動部の指導にあっていると、ほとんど休めないという教師が66.8%と、ほぼ3分の2を占める(表7)。

いずれにせよ、中学教師たちは平日はむろんのこと、休み中でも、部活動の指導などに追われ、かなり忙しい生活を送っている印象を受ける。

(表5) 部活動の担当×属性

→若い教師は担当

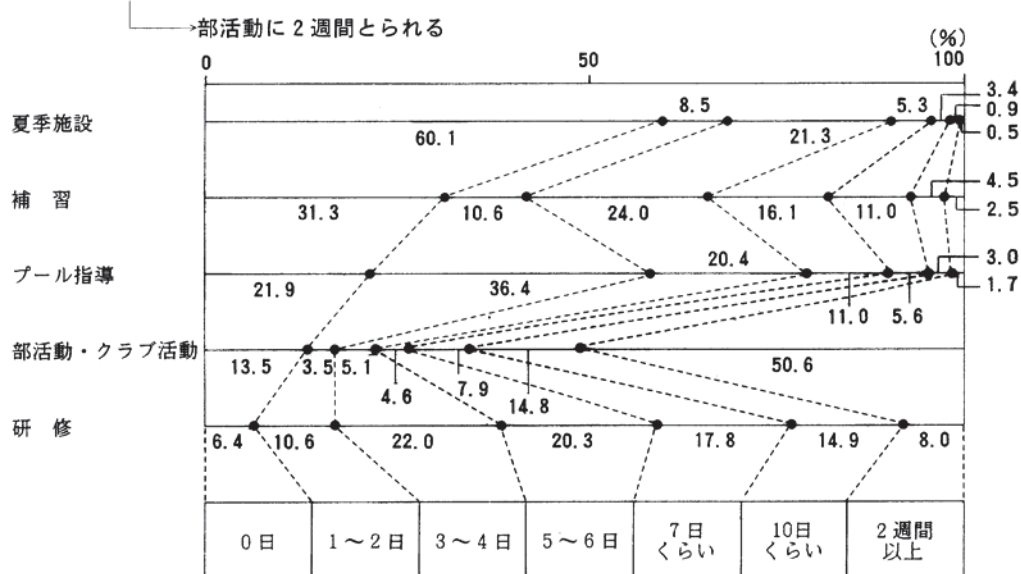
(%)

		文化部	運動部	担当していない
全 体		16.0	61.9	22.1
性	男 性	10.4	75.9	13.7
	女 性	26.0	36.5	37.5
年 代	～29歳	4.9	83.2	11.9
	30～39歳	11.3	68.2	20.5
	40～49歳	21.4	55.5	23.1
	50歳～	29.4	36.8	33.8
学 歴	教育学部	17.3	60.1	22.6
	教育学部以外	15.0	64.9	20.1
担 当 教 科	国 語	27.4	45.2	27.4
	社 会	14.9	76.8	8.3
	数 学	15.0	74.4	10.6
	理 科	13.3	60.0	26.7
	保健体育	7.2	91.8	1.0
	英 語	22.2	59.7	18.1
	美 術	8.8	32.4	58.8
	音 楽	11.1	2.2	86.7
	技術・家庭科	16.4	52.3	31.3

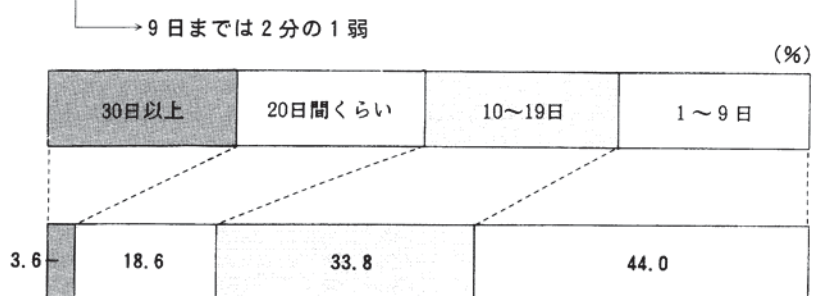
(表6) 部活動の休日の指導(1か月あたり)

	全体	男性	女性
4日以上	13.2	16.7	5.1
3日	13.0	15.5	7.4
2日	19.6	22.8	12.4
1日	22.0	22.8	20.3
やっていない	32.2	22.2	54.8

(図9) 夏休みの出勤日数



(図10) 夏休みに家にいられる日数



(表7) 夏休みに家にいられる日数×属性

→ 若い教師は10日くらい

(%)

		1~9日	10~19日	20日間くらい	30日以上
年代	~29歳	63.5	26.4	8.1	2.0
	30~39歳	47.6	33.3	16.5	2.6
	40~49歳	37.9	35.1	21.6	5.4
	50歳~	26.1	40.6	28.5	4.8
部活動	担当	運動部	27.3	5.6	0.3
		文化部	35.1	20.3	4.2
	担当していない	30.5	28.3	9.1	
全体		44.0	33.8	18.6	3.6

部活動を通して体験したこと

東京都中野区立第十一中学校教諭 亀沢信一

私が2校目の学校に赴任して、まず困ったのは、部活動のことであった。何かを担当しなくてはと思ったが、ほとんどの部はすでに顧問が決まっており、まだ決まっていないのはテニス部ぐらいだった。テニス部は、前年の秋の地区新人戦で優勝したほどの強いチームで、とても私には指導は無理だという思いがあった。一方、テニス部の生徒たちは、顧問がいなければ部がつぶれるため必死になっており、毎日のように職員室に来ては、まだ顧問になっていない先生のところをまわり、頭を下げていた。当然、生徒たちは私のところにも来たのだが、指導できないからと断っていた。

ところが、赴任して1週間ほどたった日曜日の早朝に、テニス部の生徒から電話がかかってきた。「実は、今日H中と練習試合なのですが、もし、よろしかったら、来ていただけませんか」という。顧問になったわけでもないのに変だなとは思ったが、生徒の頼みではあるし顔を出してみることにした。

相手のH中もかなりの強豪で、お互いに素晴らしい試合展開となった。試合に見とれていると、チェンジコートの度に生徒が集まってきた「アドバイスをお願いします」と頭を下げるのだが、何を言えばよいのかわからないので「ミスをしないうちに」とか「もっと元気よくやろう」など、ごく当たり前のことばかり言っていた。普通なら「この先生は何もわかっていない」とバカにするのだろうが、この生徒たちは違った。それどころか、「はい、わかりました。がんばります」と素直にうなずいて、一生懸命にやっている。「生徒たちがこんなに一生懸命やっているのに、部をつぶすわけにはいかない」という気持ちが

強くなり、次の日にはとうとう顧問を引き受けることになってしまった。

ところが、いざ活動を開始しようとする大きな問題があった。学校にはテニスコートがなかったのである。テニスの支柱やネットすらない。周囲の先生に事情を聞いてみると、部ができたのは2年前だが、その際に、既存の部の邪魔にならないように活動するという条件で発足が認められたとのこと。また実際に、校庭はたくさんの他部の多くの生徒たちが活動しており、テニス部の入り込む余地はなかった。そこで、仕方なく市のコート借りて活動した。学校からコートまでは歩いて30分近くかかり、生徒たちは鞆やラケットを抱えて移動しなくてはならず、とても大変だった。もちろん顧問の私も同様である。学校の中ならともかく、外で活動しているのだから放っておくわけにはいかない。やらなければならない仕事があっても、放課後は毎日6時まではコートにつきっきりであった。また、コートを使用している一般の人々の風当たりが強かったのもやっかいな問題だった。4面あるコートのうちの2面を無料で使わせてもらっているのに、お金を払って使用している彼らにとってはおもしろくなかったらしい。ボールが飛んでいくと、嫌みを言われることもしばしばであった。もちろん生徒たちは一生懸命にやっており悪いところはないわけで、そんな時の対応にはかなり気を遣った。

練習はほとんど毎日、土・日は大会や練習試合でつぶれることも多く、知らず知らずのうちに部活動中心の生活になっていった。授業やクラスのことを考える前に、明日の練習をどうしようということばかり考えていた（学校が平和だったから、そういうことがで

きたのだと思うが……)。指導はいつまでたっても上手くできなかったが、よい生徒に恵まれたこともあって、だんだんと部活動にのめりこんでいった。

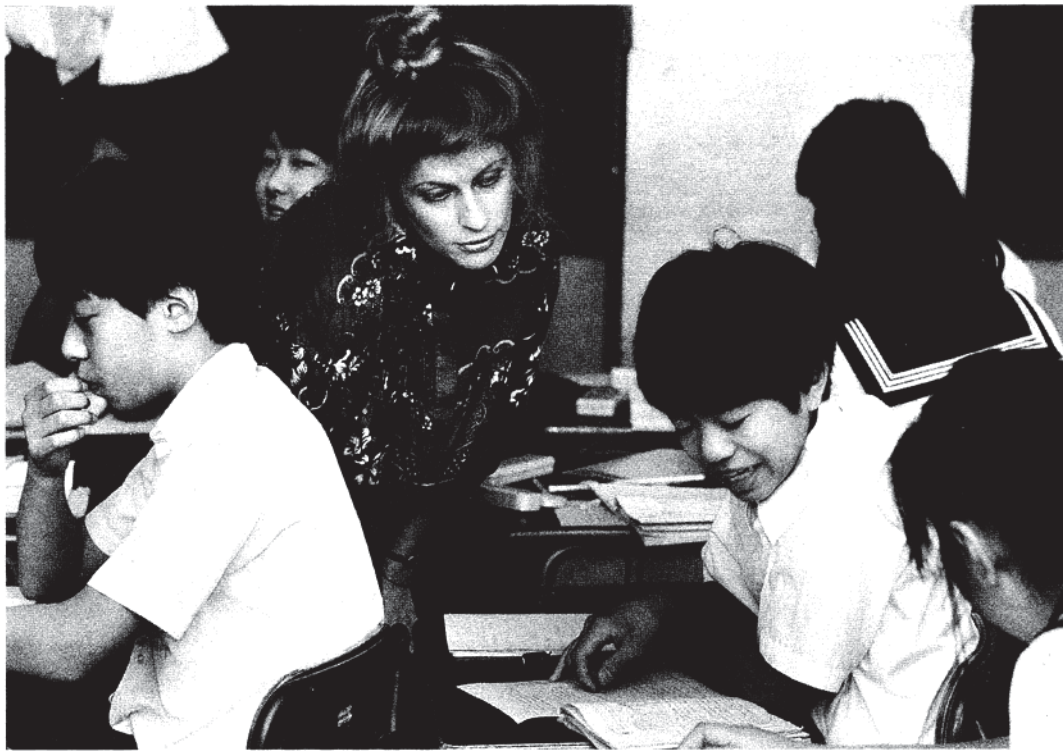
何も知らない私に、いろいろ指導してくれたのは他校のテニス部の顧問の先生方であった。特に、私の前任の先生には多くのアドバイスをいただいた。その先生のおかげで、元世界チャンピオンをはじめ有名なプレイヤーに直接教えてもらうという幸運にも恵まれた。そうした多くの人との出会いの中で、まったくの素人でも立派な指導者になっている人、また、精魂傾けて指導をしている人も数多くおり、それぞれ成果をあげていることも知った。

結局、転勤するまでの5年間顧問を務め、私自身のできる範囲で精一杯がんばったつもりである。苦労も多かったが、うれしいことも多かった。部活動の目的は勝つことだけではないと思うが、やはり生徒たちは勝ち負けにこだわる。関東大会に出場するようなチームに勝ったり、市内大会で優勝したり、地区大会で入賞したり、あるいは一度も勝ったこ

とのなかったペアが最後の大会で初めて勝ったりして、生徒たちと一緒に感激したことは忘れられない。そして何よりも、生徒が部活動を通して、技術だけでなく精神的にも成長してくれることが一番うれしかった。ある意味では仕方なく引き受けた顧問で、しかも生徒にとっては不十分な点がたくさんあったと思うが、私自身はいろいろなことを教えてもらったような気がする。

ときどき、「部活動の指導は趣味でやっている」とか「よく、休みの日に部活動なんかやられているね」などという言葉を目にする。私自身も以前はそう思っていたが、この5年間の経験を通して、けっして趣味だけでやっているわけではなく、純粋に子どものために一生懸命になっている先生も非常に多いということがわかった。そうした先生方の姿や生き生きと活動している生徒の実態をよく知らないで今まで過ごしてきたような気がする。今後は、自分が顧問としてかかわるかどうかは別として、もっともっと部活動に関心をもっていきたいと思っている。

第Ⅲ章 授業者としての教師



1. どんな授業を行うか

教師の仕事の中心はなんといっても授業であろう。そこで、まずどういう授業を行っているかを尋ねると、図11の通りとなる。板書に工夫をこらしながら、教科書にそって授業をしている教師が多い。

もちろん、授業の進め方は、担当する教科によって異なると思われるので、そうしたクロス結果を示すと、表8の通りとなる。

英語——教科書にそって授業を行い、板書に工夫をこらす

国語——教科書にそって授業をするが、ニュースを話すようにする

社会——ニュースを話しながら、ノートのとり方を指導する

美術——教科書にそうこともないし、板書をするともない

それでは、教師たちはどれくらい、授業の準備に時間をさいているのであろうか。

準備しない	1.8%
0～30分	33.5
30分～1時間	39.6
1時間～1時間半	14.0
1時間半～2時間	6.6
2時間～2時間半	2.1
2時間半以上	2.4

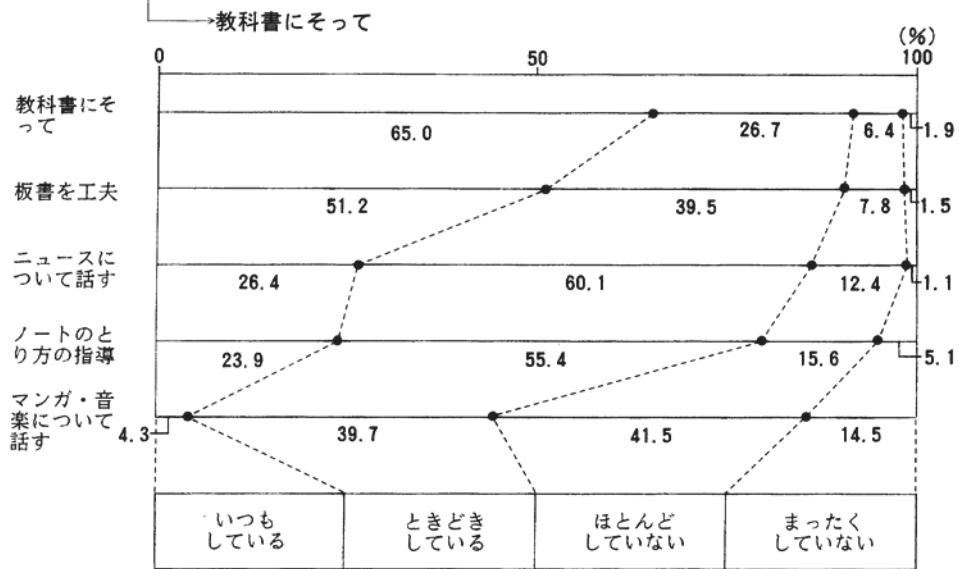
全体として、30分、長くて1時間というのが平均的な長さのようだが、これを教科別に調べてみると、教科は以下ようになる。

国語 > 理科 > 社会 > 英語 > 美術 > 家庭科・音楽 > 保健体育 > 数学

←
準備に時間がかかる (表 9)

授業の準備という面ではもっとも手間をかけているのが国語、それに対し、あまり準備をしないですむのが数学ということになる。

(図11) 授業の進め方



(表8) 授業の進め方×担当教科・年代

(%)

		教科書に そって	板書を工夫	ニュースに ついて話す	ノートの とり方の指導	マンガ・音楽 について話す
担 当 教 科	国 語	87.6	28.9	63.3	20.8	3.4
	社 会	71.8	26.8	60.8	57.7	9.8
	数 学	68.3	16.0	56.7	9.2	2.5
	理 科	68.2	26.9	59.3	29.0	4.8
	音 楽	50.0	21.7	26.1	19.6	6.5
	美 術	10.5	7.9	31.6	7.9	0.0
	保健体育	49.5	20.8	34.0	41.7	5.3
	技術・家庭科	31.6	26.7	42.1	14.5	3.9
	英 語	93.3	32.0	56.0	13.3	1.3
年 代	～29歳	63.6	15.2 ^	47.7 ^	22.5 ^	8.7 v
	30～39歳	66.0	22.4 ^	50.0 ^	31.3 v	5.2 v
	40～49歳	62.7	28.3 ^	51.6 ^	27.3 v	2.2 v
	50歳～	65.7	30.3	56.7	10.5	0.6

「いつもしている」割合

担当教科 ○ = 上位2教科

□ = 下位2教科

(表9) 教材の準備×担当教科

→ 準備のいるのは国語、理科

(%)

	30分以内	30分～1時間	小計
国語	19.1	45.0	64.1
理科	29.6	36.1	65.7
社会	23.4	44.4	67.8
英語	31.1	39.2	70.3
美術	35.1	37.8	72.9
技術・家庭科	40.0	34.7	74.7
音楽	43.5	39.1	82.6
保健体育	48.0	40.8	88.8
数学	55.5	34.5	90.0
全体	35.3	39.6	74.9

2. 教師としての自信

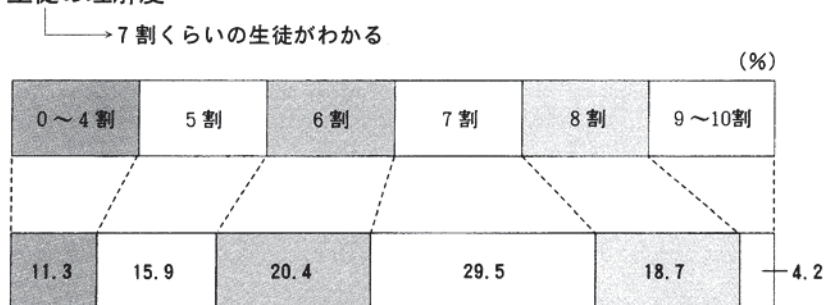
生徒たちから授業がわからないという声を聞くことが多い。そこで、教師に自分の授業をどれくらいの生徒がわかっていると思うかを尋ねると、図12の通りとなる。7割くらいの生徒はわかっているだろうと答えている教師が多い。

そこで、わかる授業をしている割合を教師の年代別にたしかめてみると、図13のような結果となる。

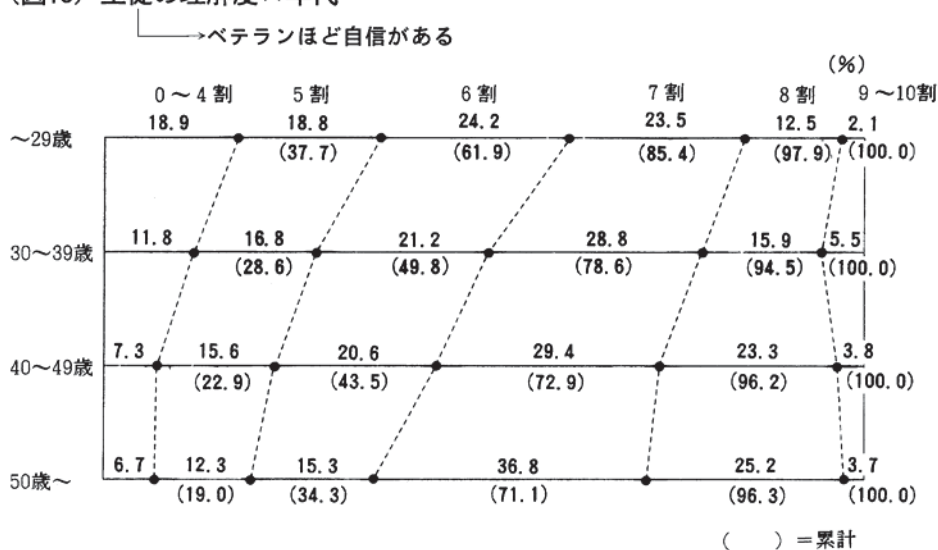
7割以上わかる	～29歳	38.1%
	30～39歳	50.2%
	40～49歳	56.5%
	50歳～	65.7%

そして、この理解度を教科別にたしかめてみると、表10のように、大半の教科は7割くらいの生徒がわかっていると思っているが、理科や技術・家庭科は6割くらいの生徒しかわかっていないだろうという教師が多い。

(図12) 生徒の理解度



(図13) 生徒の理解度×年代



(表10) 生徒の理解度×担当教科

→ 7割くらいの生徒がわかる

(%)

	0～4割	5割	6割	7割	8割	9～10割
美術	5.8	2.9 (8.7)	11.8 (20.5)	40.2 (60.7)	32.4 (93.1)	6.9 (100.0)
数学	5.9	12.6 (18.5)	22.7 (41.2)	29.4 (70.6)	24.4 (95.0)	5.0 (100.0)
音楽	4.4	21.7 (26.1)	15.2 (41.3)	34.8 (76.1)	13.0 (89.1)	10.9 (100.0)
英語	10.5	21.8 (32.3)	19.9 (52.2)	30.5 (82.7)	17.2 (99.9)	0.1 (100.0)
保健体育	10.3	13.4 (23.7)	18.6 (42.3)	35.1 (77.4)	20.6 (98.0)	2.0 (100.0)
社会	13.9	12.3 (26.2)	18.9 (45.1)	38.5 (83.6)	13.9 (97.5)	2.5 (100.0)
国語	11.8	17.6 (29.4)	23.5 (52.9)	31.9 (84.8)	11.8 (96.6)	3.4 (100.0)
理科	11.3	19.8 (31.1)	22.6 (53.7)	21.7 (75.4)	19.8 (95.2)	4.8 (100.0)
技術・家庭科	14.8	24.3 (39.1)	24.3 (63.4)	16.2 (79.6)	20.3 (99.9)	0.1 (100.0)

○ = 中央値

() = 累計

いずれにせよ、教師たちは自分の授業を7割くらいの生徒は理解していると思っている。

それでは教師たちは、教師になって何年くらいたったら自信を持てるようになったか。表11によれば、自信の持てる年齢にかなりのちらばりが認められるが、4～5年目という回答が多い。

しかし自信を持てるかどうかは教科によって異なるようで、「4～5年たったら、教師として自信が持てる」割合と教科との関係は以下の通りだという(表12)。

4～5年たったら	
① 5割以上が自信	{ 社会 (55.6%) 保健体育 (53.6%)
② 4割くらいが自信	{ 数学 (47.9%) 理科 (46.7%) 美術 (44.7%)
③ 3割くらいが自信	{ 技術・家庭科 (39.5%) 音楽 (34.8%) 国語 (33.1%)
④ 3割以下	英語 (26.7%)

これまで教師としての自信をトータルとして尋ねてきたが、もう少しこまかく、領域を

分けて尋ねると、図14のような結果が得られる。

「まあ自信がある」という答えが多いが、これを性別に着目してみると、

- 男性教師——生徒を静かにできる
- 女性教師——才能・適性を見抜ける

(図15)

となる。また年代別にみると、ほとんどの項目で、年代の上のベテラン教師が教師として自信を持っているのがわかる(表13)。

さらに、担当教科によって、教師としての自信がどのように異なるのかをたしかめると、表14のようになる。

- 保健体育——生徒を静かにできる
- 音楽——生徒の才能・適性を見抜ける
- 美術——専門の知識がしっかりしている

- 数学——生徒から信頼されていない
- 技術・家庭科——生徒を静かにできない

なんとなくわかる感じのデータだが、中学生の場合、うるさくさわぐ生徒が多いと思われるので、教室を静粛にさせるのも一苦労するのであろう。

(表11) 何年目から授業に自信を持てるか

	全 体	年 代			
		～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳～
1年目	1.6	1.2	1.4	2.7	1.2
2～3年目	16.7	23.0	19.7	8.6	13.2
4～5年目	24.5	27.2	26.7	22.8	19.5
6～7年目	12.6	2.0	12.5	21.6	12.0
10年目	12.4	0.9	7.8	21.1	22.9
15年以上	4.1	0.0	0.9	5.4	13.2
まだそう思えない	28.1	45.7	31.0	17.8	18.0

(表12) 何年目から授業に自信を持てるか×担当教科

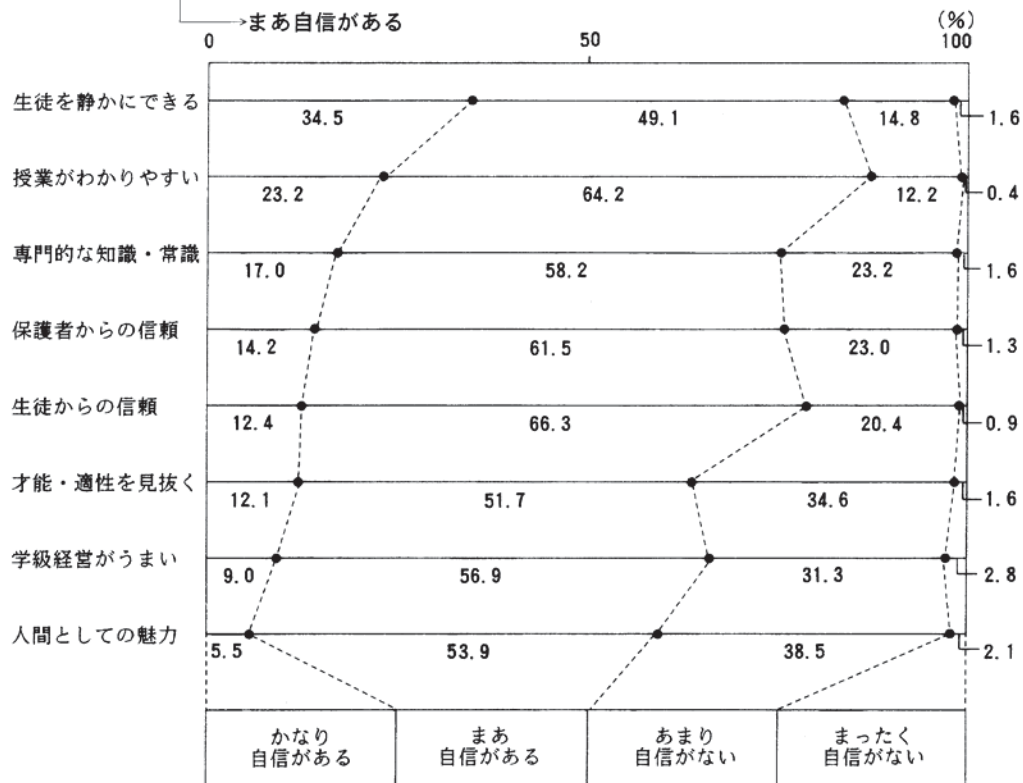
→英語と音楽はむずかしい

(%)

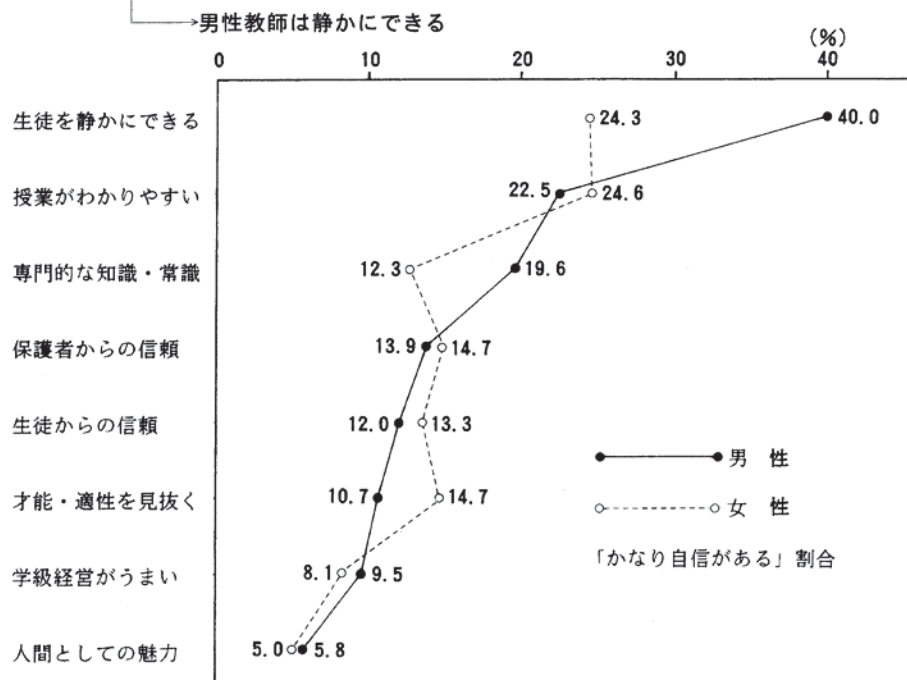
	1～3年目	4～5年目	6～7年目	10年目	15年以上	まだそう 思えない
国語	15.7	17.4 (33.1)	12.4 (45.5)	12.4 (57.9)	5.0 (62.9)	37.1 (100.0)
社会	25.8	29.8 (55.6)	6.5 (62.1)	8.1 (70.2)	3.2 (73.4)	26.6 (100.0)
数学	17.6	30.3 (47.9)	14.3 (62.2)	10.1 (72.3)	4.2 (76.5)	23.5 (100.0)
理科	19.2	27.5 (46.7)	10.1 (56.8)	11.0 (67.8)	3.7 (71.5)	28.5 (100.0)
音楽	15.2	19.6 (34.8)	8.7 (43.5)	17.4 (60.9)	4.3 (65.2)	34.8 (100.0)
美術	26.3	18.4 (44.7)	13.2 (57.9)	18.4 (76.3)	5.3 (81.6)	18.4 (100.0)
保健体育	23.7	29.9 (53.6)	13.4 (67.0)	11.3 (78.3)	2.1 (80.4)	19.6 (100.0)
技術・家庭科	15.8	23.7 (39.5)	18.4 (57.9)	13.2 (71.1)	2.6 (73.7)	26.3 (100.0)
英語	10.7	16.0 (26.7)	14.7 (41.4)	22.7 (64.1)	6.7 (70.8)	29.2 (100.0)

() = 累計

(図14) 教師としての自信



(図15) 教師としての自信×性



(表13) 教師としての自信×年代

↳ ベテランほど自信がある

(%)

	～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳～
生徒を静かにできる、	29.5 (74.9)	< 30.5 (83.1)	< 41.9 (87.1)	> 39.6 (88.1)
授業がわかりやすい	6.0 (70.9)	< 20.0 (88.4)	< 30.1 (93.5)	< 37.9 (94.1)
専門的な知識・常識	9.3 (61.6)	< 13.9 (74.2)	< 23.1 (80.1)	< 23.7 (84.6)
保護者からの信頼	5.3 (57.0)	< 10.4 (74.7)	< 16.8 (83.3)	< 27.2 (86.4)
生徒からの信頼	7.9 (68.8)	< 10.1 (76.5)	< 14.5 (83.9)	< 19.0 (86.3)
才能・適性を見抜く	2.6 (48.3)	< 8.1 (66.7)	< 15.7 (64.3)	< 24.9 (71.6)
学級経営がうまい	2.6 (45.0)	< 6.7 (66.3)	< 12.6 (76.0)	< 16.0 (73.7)
人間としての魅力	7.3 (58.4)	5.2 (59.4)	5.4 (59.7)	4.5 (60.5)

「かなり自信がある」割合

() = 「まあ自信がある」を加えた割合

(表14) 教師としての自信×担当教科

→美術教師は自信

(%)

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術・ 家庭科	英語
生徒を静かにできる	34.7	39.5	35.0	30.6	30.4	31.6	50.5	23.7	26.7
授業がわかりやすい	21.5	23.4	27.5	24.8	21.7	31.6	16.2	15.8	30.7
専門的な知識・常識	10.7	27.4	10.0	13.8	21.7	36.8	19.2	15.8	12.0
保護者からの信頼	14.0	17.1	10.7	14.7	13.0	18.4	15.2	17.1	10.8
生徒からの信頼	15.7	11.3	9.2	11.9	15.2	16.2	14.1	14.5	10.7
才能・適性を見抜く	14.2	6.5	5.0	11.0	23.9	18.4	14.1	13.2	17.3
学級経営がうまい	9.2	10.6	3.6	8.4	13.3	10.5	14.1	7.9	9.5
人間としての魅力	5.0	8.1	2.5	4.6	6.7	10.8	6.1	3.9	5.4

「かなり自信がある」割合

○ = 最大値

— = 最小値

教師にとって年齢を重ねるとは

石神井服飾専門学校教頭 長嶋 安男

遠いむかし、大学生の頃、亀井勝一郎の『愛の無常について』を読んだことがあった。これがきっかけで、その後、氏の著作にはできるだけ目を通すようにしてきた。『親鸞』もその1つである。この本の中に、次のような一節があった。

「総じて師たるものの苦悩は、弟子を導かうとする苦心などではない。わが得たるかぎりの信心や智識を、弟子に与えんとするものは師とするに足りぬ。自分が知ってゐることを教えるのが師ではなく、自分の知らんとして知り難いものの内奥へ、相共に参入せんといふのがまことの師である。」

心打たれる文章であった。ノートにメモして、教師になってからあとも、驕慢の心が頭をもたげてきたときなど、そっと出しては何度か繰り返して読み、反省の糧としてきた。

しかし、形振りかまわず教育実践に没頭していた青年教師の頃は、ややもすれば、「わたしこそ真の教師……」と思わなかったかといえ、それは嘘になる。思い出しても恥ずかしい青年教師の姿だった。

公立中学校の教師になって半年余り経った頃、わたしは突然、病床の人となった。肺結核だった。高熱が続き、一時は回復が危ぶまれるほどであった。特効薬のお蔭で漸く病状が治まると、やたらと担任の生徒たちのことが気になった。「わたしがいなくなっても、生徒たちはちゃんと成長していつてくれるだろうか?」と、真面に悩んだものである。来る日も来る日も、主治医に「いつ退院できるか」と質問した。その度に、主治医はにべもなく、「最低、3年間は病院生活でしょうね」と応答した。その言葉は、当時のわたしにはほとんど死刑宣告のように聞こえたもの

である。

闘病生活1年目の冬が過ぎ、桜も葉桜になった頃、3年生になった生徒たちが数名、前学年のときの学級全員で編集した学級文集を携えて、遠い清瀬の療養所までお見舞に来てくれた。その嬉しかったこと!一人一人が背丈も伸び、見事な若者に成長しつつあった。

その夜、文集を貪るように読んだ。生徒一人一人の顔がくっきりとかぶ。文章の1つ1つに“成長の証”があった。学級委員のT君の作文「学級委員という名のぼく」のところで胸をつかれた。

T君は、後期の学級委員だった。11月の半ばすぎ、担任の先生が突然、教室から消えた。きょうは来るか、きょうは来るかと待つ。朝、短学活のとき、廊下に先生方の足音が聞こえる。やがて、曇りガラスの向こうに先生の姿が止まる。生徒は、一瞬、ざわめきを止める。ガラッと戸が開く。K先生だ。「ワーッ」と、騒ぎは前以上大きくなる。T君もほかの生徒たちに負けないほど大声をあげたという。そんな日が何日も続いた。T君は相変わらず騒ぎ続けたのだが、ある日、困り切って教壇に立ち続けるもの静かな新任のK先生に気づく。「ぼくは学級委員じゃないか。みんなと一緒にこんな騒ぎを続けていていいのか。クラスをまとめることこそ、ぼくの今の仕事」と気づいたという。各委員を集め、班長を集め、毎日のように学級会を持った。K先生を助けてクラスの立て直しに全力投球した。

「学級委員という名のぼく」は、そのときのT君の奮戦記なのである。幾度も読み返し、わたしは涙が止まらなかった。「わたしがいなくなって、生徒たちは」と驕り高ぶっていたわたしは、ひとりで見事に人間的成長を遂

げていくT君に、ただ脱帽する思いだった。

昨年、長い海外勤務を終えて本社に戻ってきたT君は、早速にわが陋屋を訪ねてくれた。T君は、わたしにとって最早教え子ではない。師である。わたしが教師として歩むべき道を教えてくれた本当の師だったと思う。

長い間、教師生活を続けてきた。いろいろな人柄の生徒たちに出会ってきた。そして、その一人一人から教えられることが多かった。感謝している。だが、ただ感謝するだけで済むものだろうか。

亀井勝一郎の言葉には、次のようなものもある。

「私は人生における最大事は^{かいこう}邂逅だとしばしば語ってきた。或る時期、誰と出会ったこと

で心を転換せしめられたか。その『誰』が人生の根幹を成すのではないか。——中略——邂逅による開眼こそ、人生において感謝すべき第一のことではなかろうか。自己は自己からのみ生まれることは出来ない。必ず他者において自己となる。(後略)」(『小説新潮』昭和31年8月号『人生における祈りについて』)

教師は、この『誰』にならなければならないと思う。なるよう努めなければならないと思う。教師が年齢を重ねるといことは、たとえ満足できるところまで到達できなくとも、この『誰』になるべく研鑽を重ねることではあるまいか。そう思う今日この頃である。

● 現場からの発言

教師としての自信

東京都新宿区立牛込第二中学校教諭 伊藤 澄生

教師が一人前の教師として自信が持てるようになる背景には、次のような要素が考えられる。

- ・自分の担当する教科の指導に自信が持てるようになること
- ・生徒が集団で活動するとき、生徒の行動を掌握し、コントロールできるようになること
- ・一人一人の生徒の性格や特性が適確に判断できるようになること
- ・生徒からの信頼が得られるようになること
- ・保護者からの信頼が得られるようになること
- ・校務分掌や学年・学級の事務処理が円滑にできるようになること
- ・職員間での自分のポジションが認められるようになること
- ・部活動の指導で十分な成績をおさめることができるようになること
- ・生徒の進路指導が十分にできるようになる

こと

以上9つの要素を列挙したが、もちろん、教師としての自信の背景になる要素はこれだけではないと思う。しかし、少なくともこれらの要素が有機的に複雑にからまりあながら教師としての自信が形成されるのであって、1つや2つの要素が背景となって形成されるものではないだろう。

今回の調査で、「何年目から授業に自信が持てるようになったか」という質問に対して表11(P.29)のような結果がでている。それによれば、2年から5年程度の経験年数で約40%が自信を持てるようになったとしている。確かに中学校の場合は3年間で1つの周期になるから1回りすれば、中学校の教師としては一通りの経験を積むことになる。2年から5年という経験年数は、2回りまでは至らない年数である。しかも、おそらくは新卒

で入ってまだ1つの学校しか経験していないだろうと思われる。その程度で、本来の教師としての自信が形成されるのだろうか。

私の知っている今年経験年数4年目の教師に同じ質問をしたところ、次のような答えがかえってきた。

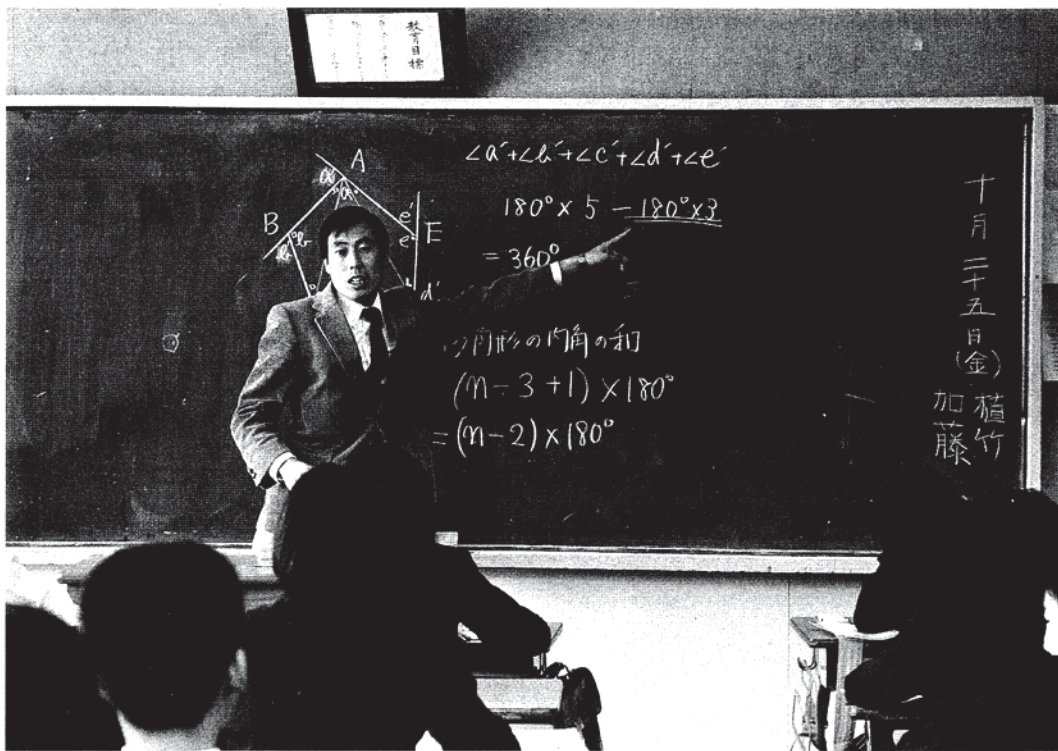
「なんとなく中学校の教師としてやっていけるような自信みたいなものはあるにはある。でも、それはこの学校で通用することであって、ちがう学校に行ったらどうなるかわからないですね」

調査の結果で、「まだそう思えない」という答えが28%であるのは、ある意味では納得できる数字のような気がする。

教師としての自信×年代（P. 32・表13）の結果を見ると、それぞれの項目に対してベテラン教師ほど自信がある。この結果も妥当であるといってよいだろう。

教師の仕事は、一人一人個性のある生徒とのかかわり合いである。1つ1つの事例を蓄積して、それを財産にして、教師としての職業が成り立つのだろうと思う。

第IV章 理想的な教師とは



1. 教師として力を入れたいこと

それでは、教師たちは教師として、どうい
う教師になろうとしているのか。教師として
力を入れたいことについては、図16に示した
通りである。

まず、「わかりやすい授業を」が第1位で、
以下、「趣味の時間を持つ」「学級活動を活発
に」が続く。

そこで、教師の世代別に、力を入れたいこ
とを調べてみると、表15のような結果になる。

若い教師が
力を入れたい

- 1. 授業をわかりやすく
- 2. 部活動を活発に
- 3. 学級活動を活発に
- 4. 行事を盛んに

ベテラン教師が
力を入れたい

- 1. 生徒と接する時間を増やしたい
- 2. 研修に参加したい
- 3. 校務に力を注ぎたい

さらに、担当教科との関係では、次のよう
な結果が得られる(表16)。

英語———授業をわかりやすく、学級
活動を活発にしたい

美術———趣味の時間を持ち、同僚と
のチームワークをよくしたい

保健体育———部活動を活発にしたい

国語———校務に力を注ぎたい

音楽———行事を盛んにしたい

数学———学級活動にあまり熱心でない

技術・家庭科—生徒と接する時間を増やし
OA機器を導入したい

こうした結果に、いかにもその教師らしさ
が感じられるが、生徒たちから、どうい
う教師だと思われるかは、図17の通りである。

1. ひいきしない
2. 明るい
3. 授業に熱心

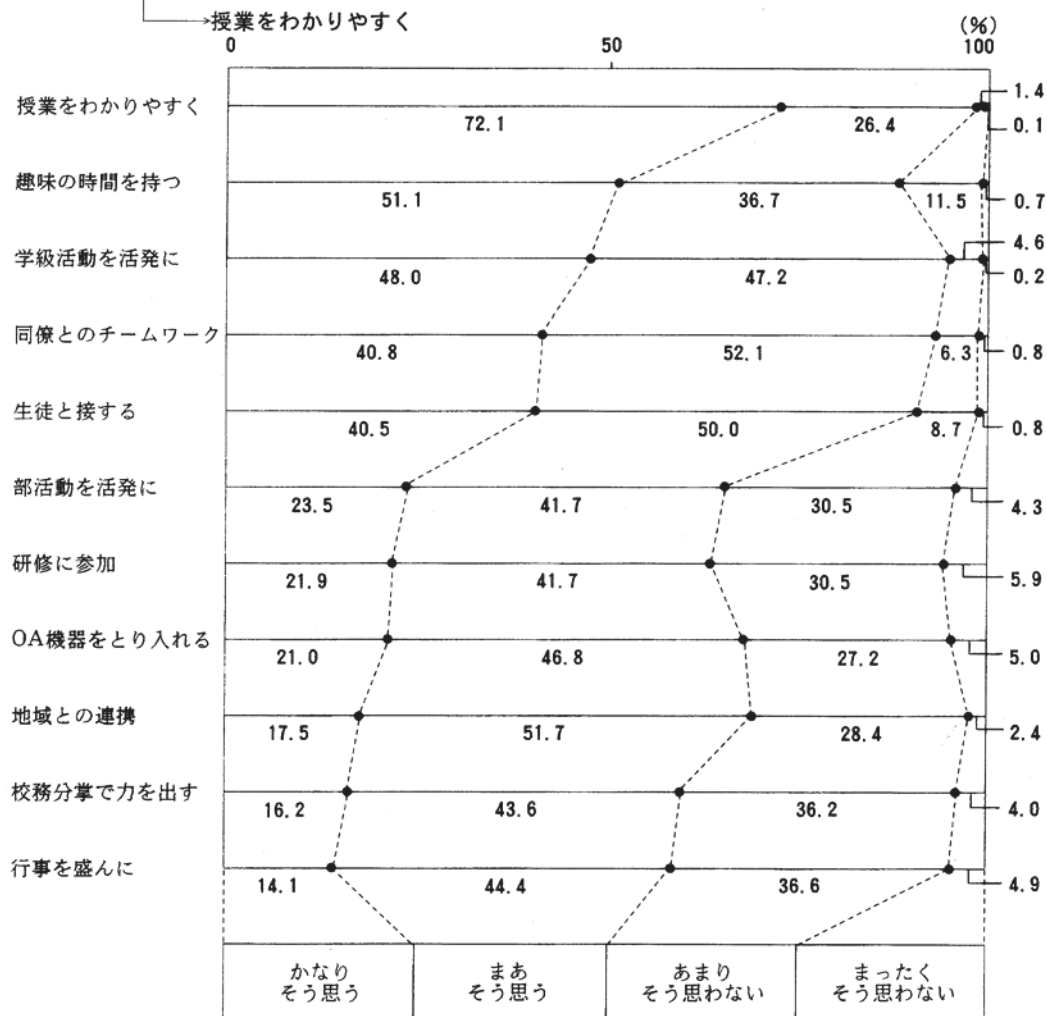
さらに、どんな教師と思われるかと年

代との関係を調べてみると、表17のような結果が得られる。

- 若い教師
1. 明るく
 2. スポーツが得意で
 3. 生徒と一緒にがんばる教師

- ベテランの教師
1. 授業に熱心で
 2. 知識が豊かで
 3. ひいきしない教師

(図16) 力を入れたいこと



(表15) 力を入れたいこと×年代

↳ ベテランは生徒と接する時間を

(%)

	～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳～
授業をわかりやすく	75.5	74.7	74.7	61.1
趣味の時間を持つ	60.9	49.9	50.0	45.5
学級活動を活発に	52.4	49.7	48.4	39.0
同僚とのチームワーク	35.8	39.5	47.0	41.6
生徒と接する	37.7	41.0	40.0	41.8
部活動を活発に	34.4	25.4	15.5	17.6
研修に参加	11.3	14.6	18.4	21.5
OA機器をとり入れる	25.8	22.7	17.7	16.8
地域との連携	16.6	15.2	20.8	20.0
校務分掌で力を出す	11.3	14.6	18.4	21.5
行事を盛んに	19.9	14.9	10.9	11.0

「かなりそう思う」割合

○ = 最大値

— = 最小値

(表16) 力を入れたいこと×担当教科

→ 英語教師は授業をわかりやすくしたい

(%)

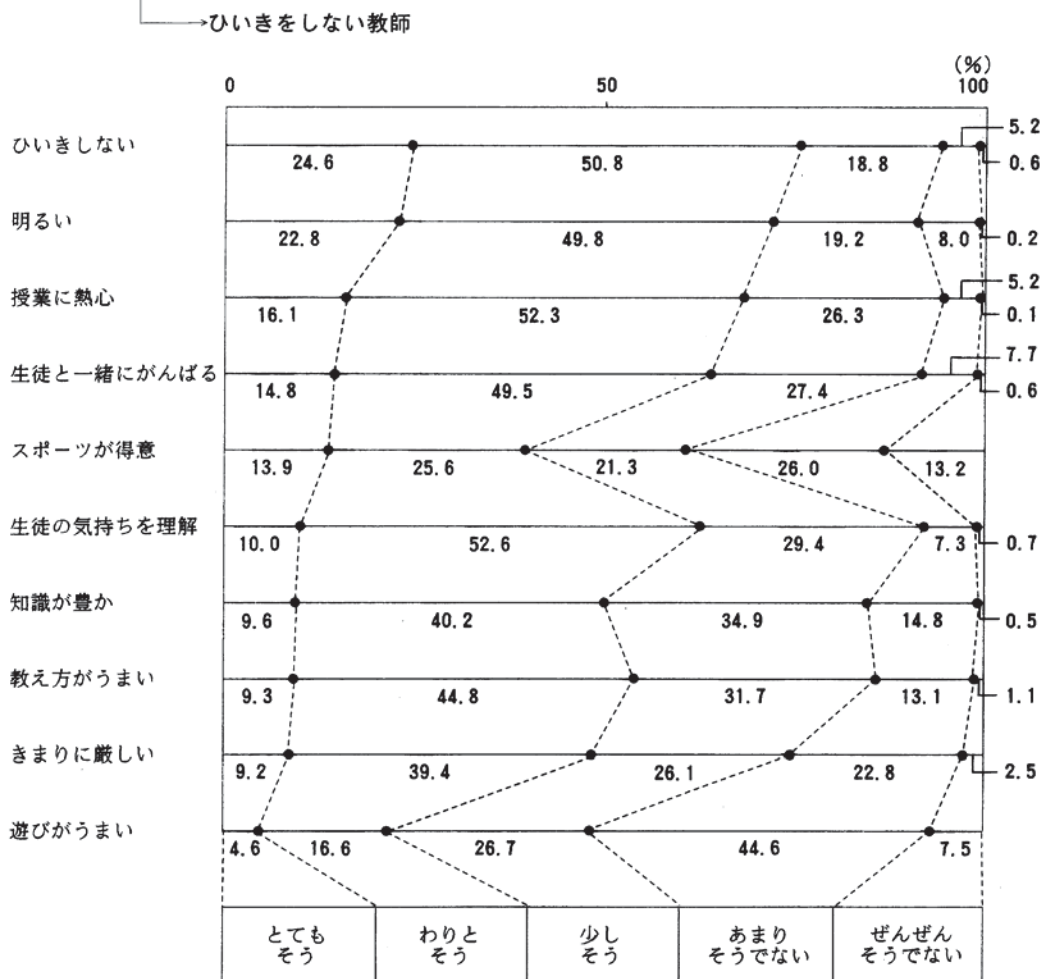
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術・ 家庭科	英語
授業をわかりやすく	78.5	77.4	72.5	78.0	73.9	60.5	<u>54.5</u>	61.8	<u>80.8</u>
趣味の時間を持つ	57.9	44.7	52.3	46.3	58.7	<u>67.6</u>	<u>44.4</u>	51.3	50.0
学級活動を活発に	52.1	47.5	<u>40.7</u>	50.9	41.3	45.9	45.4	46.7	<u>64.3</u>
同僚とのチームワーク	40.0	41.1	41.7	38.0	<u>34.8</u>	<u>48.6</u>	39.8	40.8	44.6
生徒と接する	46.3	43.1	<u>33.3</u>	38.9	39.1	40.5	38.1	<u>50.0</u>	35.1
部活動を活発に	13.7	30.8	29.9	15.9	24.4	27.0	<u>36.7</u>	<u>12.2</u>	18.1
研修に参加	24.0	22.6	<u>11.8</u>	25.0	28.3	<u>36.1</u>	13.4	25.0	24.3
OA機器をとり入れる	21.5	16.9	27.5	24.3	21.7	<u>10.8</u>	18.6	<u>28.9</u>	13.5
地域との連携	12.4	17.9	15.0	22.2	15.2	24.3	20.0	<u>25.3</u>	<u>12.2</u>
校務分掌で力を出す	<u>19.8</u>	16.3	16.8	16.0	19.6	13.5	<u>19.8</u>	<u>13.2</u>	13.7
行事を盛んに	11.6	12.2	13.3	14.8	<u>39.1</u>	<u>8.3</u>	14.4	13.3	13.5

「かなりそう思う」割合

○ = 最大値

— = 最小値

(図17) どんな教師とされているか



(表17) どんな教師とされているか×年代

→ 明るい教師…若い世代

(%)

	～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳～
ひいきしない	16.1	17.2	27.4	44.4
明るい	29.5	23.8	18.8	18.9
授業に熱心	9.4	14.0	15.1	27.8
生徒と一緒にがんばる	17.4	12.5	15.1	17.3
スポーツが得意	20.1	14.3	11.3	10.1
生徒の気持ちを理解	8.1	7.3	8.6	18.9
知識が豊か	6.0	6.7	11.9	16.2
教え方がうまい	4.0	7.8	12.4	13.6
きまりに厳しい	4.7	11.0	8.6	9.6
遊びがうまい	8.1	5.5	2.2	2.4

「とてもそう」の割合

○ = 最大値

2. 教師はどうあるべきか

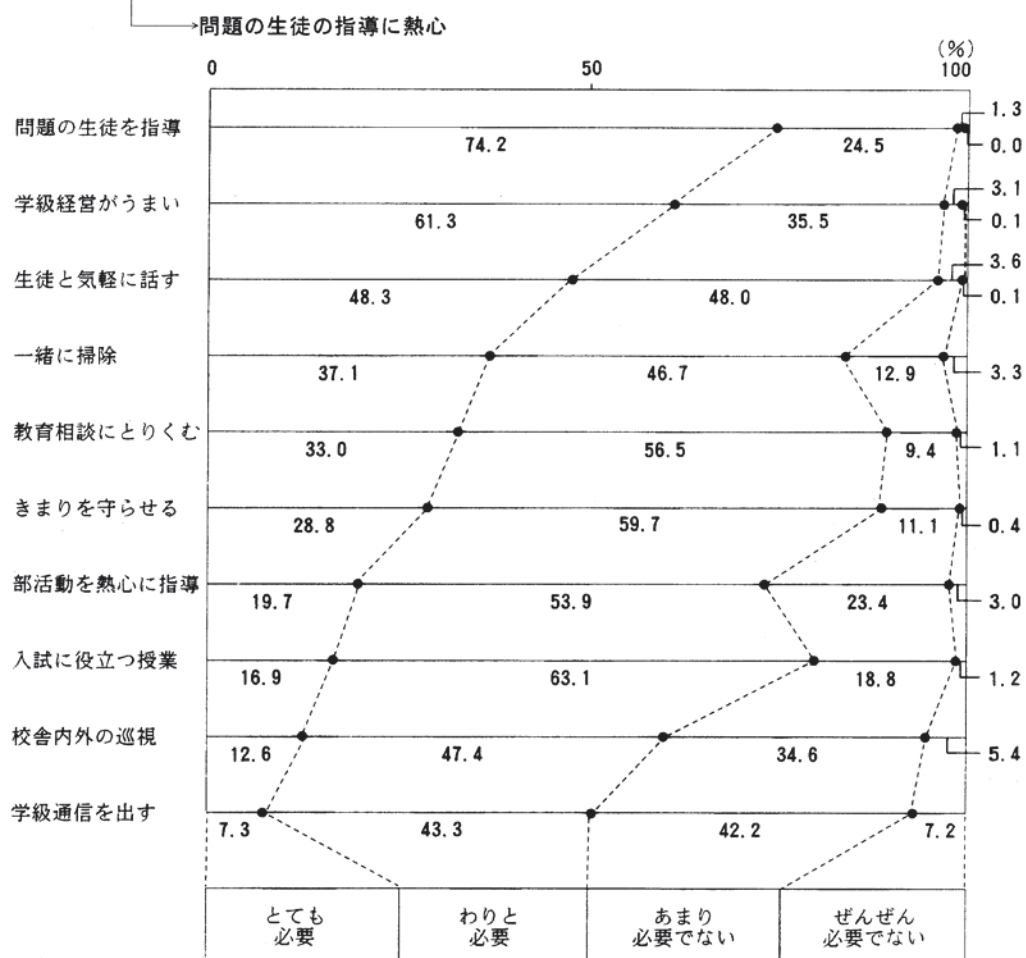
それでは教師たちは、どういう教師になろうとしているのか。教師たちの抱く「教師として必要なもの」は、図18の通りだという。

1. 問題の生徒の指導に熱心で
2. 学級経営もうまくて
3. 生徒と気軽に話せる教師

そして、教師の属性別に、中学教師として必要なものを調べると、表18のような傾向が得られている。

年代	若い教師	→	ベテラン教師
担当教師	(一緒に掃除をする)		(問題の生徒の指導をする)
	国語	—	問題の生徒を指導する
	社会	—	入試に役立つ授業をする
	英語	—	一緒に掃除をする
	保健体育	—	生徒と気軽に話せる
	技術・家庭科	—	学級通信を出す

(図18) 中学教師として必要なもの



(表18) 中学教師として必要なもの×属性
 ↳ ベテラン…問題の生徒の指導

	全体		性		年			代			担 当				教 科	
	全体	性		～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳～	国語	社会	数学	理科	保健体育	技術・家庭科	英語		
		男性	女性												英語	技術・家庭科
入試に役立つ授業	16.9	18.7	13.4	15.6	16.4	17.9	13.4	16.7	23.4	15.0	18.5	11.2	13.2	20.3		
問題の生徒を指導	74.2	72.6	77.2	68.9	72.9	75.5	78.6	80.8	75.0	70.6	72.5	75.8	69.7	74.3		
学級経営がうまい	61.3	58.0	67.3	57.8	61.0	62.7	57.1	65.8	54.8	58.0	59.6	60.6	56.6	67.1		
学級通信を出す	7.3	6.6	8.7	24.4	4.5	7.9	10.7	6.6	8.9	6.7	6.4	6.1	9.3	4.1		
生徒と気軽に話す	48.3	44.4	55.3	53.3	45.8	49.9	50.0	55.4	48.4	39.2	43.1	56.6	46.1	45.9		
部活動を熱心に指導	19.7	24.4	10.9	18.2	17.5	21.0	32.1	16.0	23.6	22.5	16.7	34.3	13.3	9.7		
教育相談にとりくむ	33.0	32.1	34.8	46.7	30.4	34.0	32.1	36.4	33.1	30.0	28.4	35.4	30.3	26.0		
校舎内外の巡視	12.6	14.5	9.1	18.2	10.7	13.6	11.1	9.1	10.6	11.7	9.3	26.3	12.2	9.5		
一緒に掃除	37.1	35.0	41.0	50.0	36.8	35.9	39.3	34.7	35.5	36.7	31.2	40.8	38.2	41.9		
きまわりを守らせる	28.8	28.3	29.8	37.8	25.7	27.0	35.7	30.3	23.4	25.8	28.4	36.4	31.6	23.0		

「とて必要」の割合

図19に、教師としてどういうことをすべきか、あるいは、してはいけないかについての結果を示した。

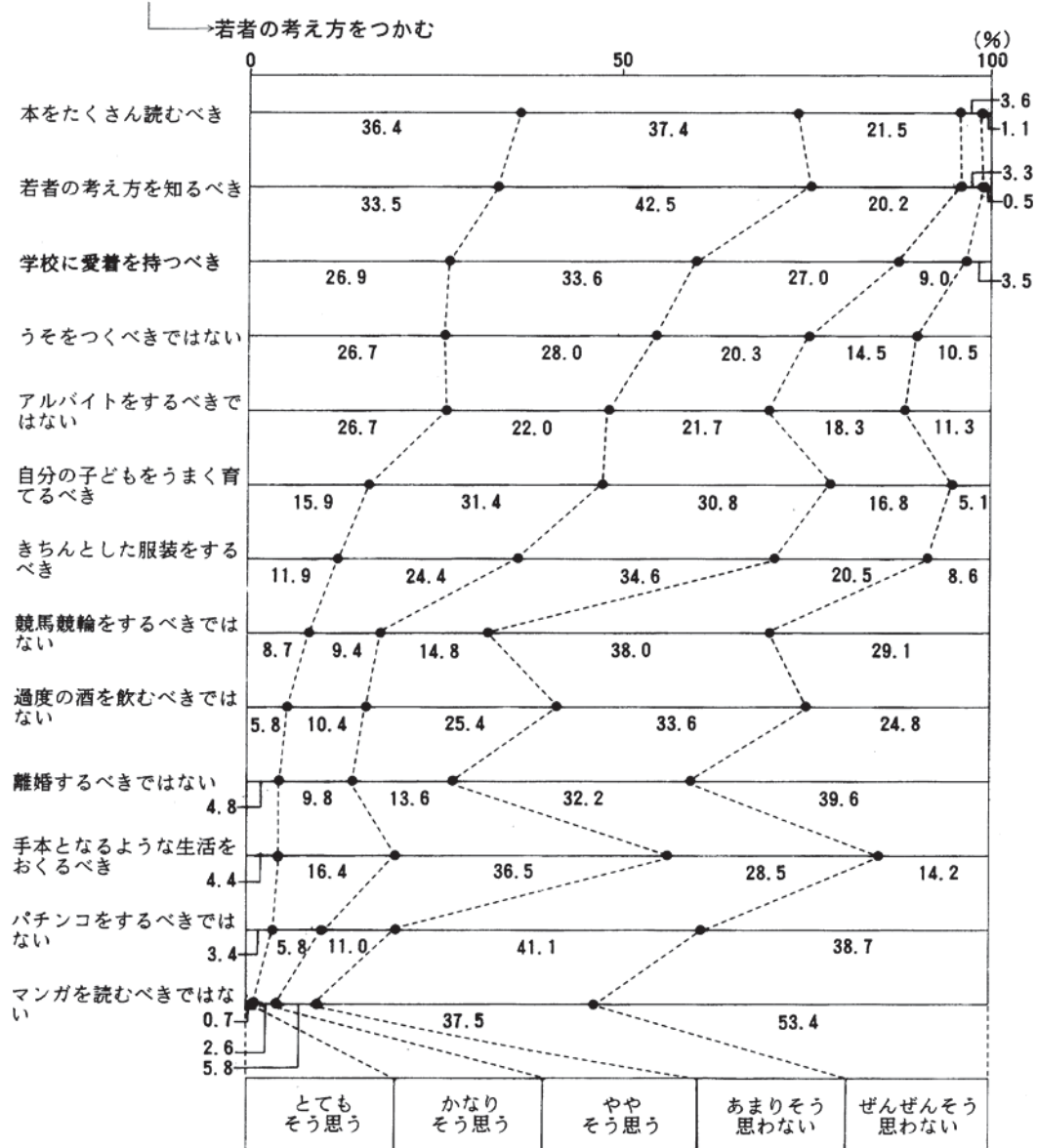
- そうすべきだ { 1. 若者の考え方を知る
2. 学校に愛着を持つ
- そうすべきとは思わない { 1. パチンコをすべきでない
2. 離婚すべきでない

この中で教師の離婚、パチンコ、飲酒、競馬などをどう思うかを尋ねると、「そう思

う」という回答は少ない。

表19に示したように、「離婚すべきではない」と思う教師が、「かなり」の9.8%に「とても」の4.8%を加えても14.6%にすぎない。そして、「ぜんぜんそう思わない」者は39.6%と、4割に達する。教師だからといって、離婚すべきでないというのは古い感覚になったらしい。それでも、教師は、「きちんとした服装をすべきだ」は、ベテランの教師を中心に「ややそう思う」者が多い(表20)。

(図19) 教師はどうあるべきか



(表19) 教師は離婚するべきではない×属性

→ とは思わない

(%)

		そう思う			そう思わない	
		とても	かなり	やや	あまり	ぜんぜん
全 体		4.8	9.8	13.6	32.2	39.6
性	男 性	6.0	11.6	17.0	33.2	32.2
	女 性	2.7	6.4	7.4	30.4	53.1
年 代	～29歳	2.0	8.0	14.7	30.0	45.3
	30～39歳	4.6	7.6	14.2	33.6	40.0
	40～49歳	5.9	11.4	11.4	33.5	37.8
	50歳～	6.5	13.6	14.2	30.2	35.5
担 当 教 科	国 語	4.1	5.8	9.9	28.9	51.3
	社 会	5.7	12.2	16.3	27.6	38.2
	数 学	1.7	8.4	19.3	39.5	31.1
	理 科	6.4	8.3	11.9	37.6	35.8
	保健体育	5.1	11.1	17.2	32.3	34.3
	技術・家庭科	3.9	10.5	10.5	34.2	40.9
	英 語	5.3	14.7	12.0	30.7	37.3

(表20) 教師はきちんとした服装をするべき×属性

→ ややそう思う

(%)

		そう思う			そう思わない	
		とても	かなり	やや	あまり	ぜんぜん
全 体		11.9	24.4	34.6	20.5	8.6
性	男 性	11.3	25.4	32.7	20.1	10.5
	女 性	13.0	22.4	38.5	21.1	5.0
年 代	～29歳	10.6	22.5	33.1	22.5	11.3
	30～39歳	9.3	21.7	36.9	21.7	10.4
	40～49歳	13.7	25.7	34.3	20.8	5.5
	50歳～	16.6	30.2	31.9	15.4	5.9
担 当 教 科	国 語	11.7	20.0	34.1	26.7	7.5
	社 会	8.9	28.2	31.4	20.2	11.3
	数 学	11.8	27.7	33.6	21.0	5.9
	理 科	10.1	26.6	37.6	15.6	10.1
	保健体育	14.3	20.4	32.7	20.4	12.2
	技術・家庭科	10.5	27.6	36.9	19.7	5.3
	英 語	17.3	28.0	37.4	16.0	1.3

中学教師として必要なこと

———高校教師と比較して———

埼玉県立小川高校教諭 三枝 恵子

高校の教師が中学校の先生方と話をすることは、入学試験のための学校説明会や地域の小・中・高校の生活指導のための情報交換などである。そうした中で、中学校の先生方から「高校の先生は生徒の指導をどのようにしているのか」との質問をよく受ける。この場合の指導とは、服装・頭髪・バイク乗車・アルバイト・異性交際などの生活指導のことである。そして、「生徒指導を厳しく行い、大学への受験指導に熱心な高校こそ、中学生やその保護者にとって信頼できる学校であり、教師としてもぜひ進学させたい学校である」と話される。また、「高校では中退や留年が可能であるが、中学ではそのようなことができないため、生活指導を厳しくしなければ。そのためには部活動にも熱心にならなければ……。」と話される。どの言葉も小・中・高校の教師の中で最も忙しい仕事といわれる中学校の先生方の本心であろう。

今回の調査データによると、中学教師にとって必要なものとして「問題の生徒を指導する」「学級経営がうまい」「生徒と気軽に話す」「一緒に掃除をする」「教育相談にとりくむ」「きまりを守らせる」の項目で「とても・わりと必要」としている割合は約9割にも達している。これは、中学教師が、生活指導に重点を置いた指導をしていることを示している。こうした状況では、前述のような高校の生活指導への批判的とも受けとれる発言も理解できる。

では、高校教師にとって必要な能力・姿勢とはどのようなものであろうか。

高校の授業も中学と同様、教科担当制がとられている。生徒にとって教科担当の先生が

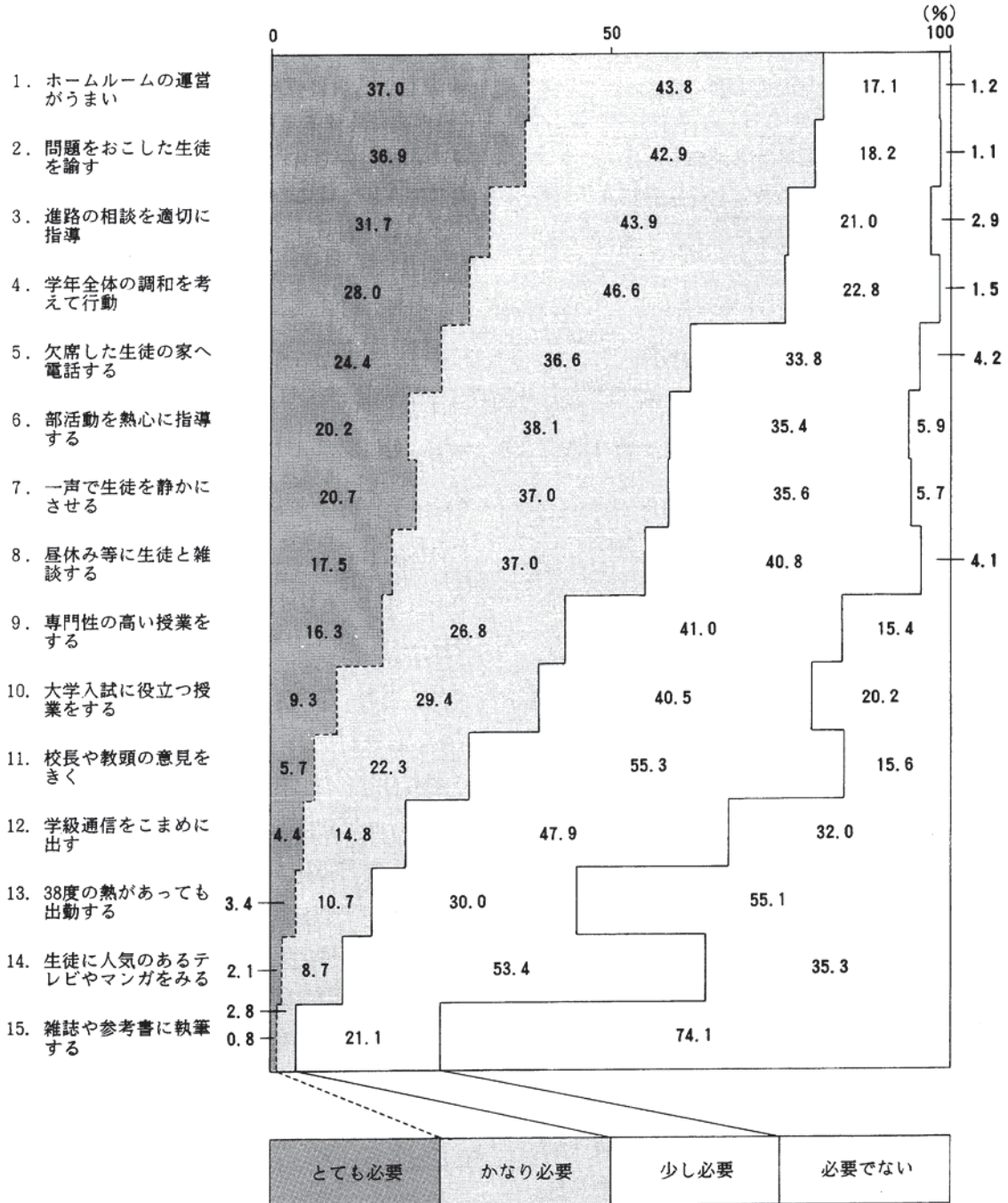
だれかはHR担任よりも重要な関心事となることも多い。自分の高校時代をふり返っても、HR担任であっても授業を1時間も担当しない教師は多かったように思う。また、先生方は授業の準備と授業の充実にエネルギーを費やし、教師と生徒は授業を通して共感しあい、交流があったように思う。あの頃の教師にとっては豊かな専門的な知識を持った授業者であることが必要性の大きな比重を占めていたように思う。

そして今、自分が教師になって、高校教師にとって必要な能力・姿勢は何であるかと考えてみると、高校への進学率が90%を超えている現実が大きく影響しているように思う。「モノグラフ・高校生'90」vol.28『高校教師の生徒観とライフスタイル』（福武書店）によれば、「HR運営がうまい」「問題をおこした生徒を諭す」「進路の相談を適切に指導する」「欠席した生徒の家への電話連絡」など、中学教師と同様に生活指導の領域が仕事の内容として大きな比重を占めている（図1）。

高校教師は授業内容とともに、HRの集団指導や生徒との人間的接触などカウンセラー的役割も重視しているようである。

また、高校間格差も教師の仕事の内容、必要性の意識を大きく異なったものになっている。専門的知識を講義し、大学受験のためのむずかしい問題を解くことを期待される教師、ABCを黒板に書いていねいに書き、発音練習をさせている教師、教科書を使わずかけ算や分数計算のプリントを使って指導する教師、喫煙・万引き・暴力事件のため取り調べと警察との連絡に終日追われている教師、学校に来ない生徒や問題をおこした生徒の家に家庭訪問

(図1) 高校教師として必要な能力・姿勢



(「モノグラフ・高校生'90」vol.28『高校教師の生徒観とライフスタイル』より)

をくり返す教師と、その勤務校の状況において仕事の内容も必要性もさまざまである。

こうしてみると、現在の高校教師にとって専門的知識だけの教師では多くの学校では通用せず、生徒たちとの人間的な触れあいを大切にした役割の重要性も強く要求されていることとなる。

この点では中学教師も同様であり、クラスの生徒の状況から考えても高校教師より一層複雑な対応をしなければならないであろう。

しかし部活動の練習を強化することや、校則による厳しい生活指導は、生徒に対しより指示的、管理的内容のものが増える傾向も予想されよう。

高校に入学した生徒たちが、部活動の活動状況やクラスの係を決める話し合いの中で「内申書に関係あるの」と質問する。日常生活の中で自分で決め、行動することがなかなかできない生徒たちの現状の中でとても気になることである。